

日本郭沫若研究会事務局

二〇一五年二月一日発行

郭沫若研究會報

第十四号 (総 No. 15)

目次

医学・文学・身体	
— 郭沫若を例として	藤田 梨那……1
一九二四年三月中華学芸社	
第一屆年会における郭沫若の講演を巡って	坂井 洋史……7
『蔡文姬』は大漢族主義の作品か	
— 一九八〇年『草原』に現れた論議のこと—	杉本 達夫……11
郭沫若と傅抱石（一九〇四・一九六五）	
— 日本における交流—	成家 徹郎……14
『女神』“演奏会上”における	
“一个男性的女青年”の考察	香月 隆……19
「演奏会上」の背景	岩佐 昌暉……24
泉州開元寺と郭沫若、弘一法師について	齊藤 孝治……26
郭沫若の律詩「詠泉州」について	(Y) ……28
【資料紹介】	
林謙三の放送原稿発表について	編集部……29

▼NHK国際放送原稿▲

郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』	
林 謙三……29	
郭沫若と林謙三について	長谷部 剛……31
君 故郷より来る	
— 樂山沙湾郭沫若記念館を紹介する	
陳 俐著・岩佐 昌暉訳……34	
日中学術研究集会「清末民国初期の来日中国人	
留学生と中国現代文学」について	編集部……38
執筆者紹介	……19

二〇一五年十二月一日発行
日本郭沫若研究会事務局
〒810-0031 福岡市中央区谷2-20-8-311
岩佐方

TEL & FAX 092-715-2554
ホームページ http://www7b.biglobe.ne.jp/~guomoruo/

医学・文学・身体——郭沫若を例として

藤田梨那

序

郭沫若文学において、「医学・文学・身体」は重要な論題である。なぜなら、彼は青年期に日本で学んだのは医学であり、目覚めたのは文学である。この二つの分野で彼は西洋の様々なものを吸収した。医学は人間の身体を対象とし、文学は人間の心、精神を対象とする。彼は生涯医療に従事することはなかったが、しかし、彼の文章や文学作品に科学や医学に言及することが多く見られる。彼の精神世界の根底には科学、医学が脈々として潜在する。科学的知識及び科学的精神がいかに彼の文学に関わり、彼をして、近代文学の新しい世界を開拓させたか、これは文学研究者にとつて、興味深い問題である。この論文では、郭沫若の初期の小説「残春」を例として、医学・文学・身体の問題を探っていくことにする。

一、近代社会における結核の流行

結核は十六世紀から十九世紀にかけて地球上で最も広範囲に蔓延した伝染病の一つである。数世紀にわたり結核は多くの命、特に若い命を奪い続けた。日本では、明治時代に結核が大流行し、「国民病」とも、「亡国病」とも呼ばれた。しかし、実は結核はもともと古い病気である。古代ギリシャやエジプトにすでに出現した。日本でも奈良時代には既に結核の伝入が見られた。大流行を始めたのは都会化と産業化が発展し始めた近代である。

結核は長い間“肺病”“肺癆”“労咳”と呼ばれてきた。

近代医学以前、人々は病を神が人間に下した罰と考えていた。また結核を遺伝病とも伝染病とも考えていた。一八八二年、ドイツの細菌学者ロベルト・コッホが結核菌を発見し、伝染説が定着した。結核に関する病原体説はほとんど一世紀ほど前に登場したにもかかわらず、それまでの伝統的な考え方を覆し、今日まで医学界を牛耳ってきた。コッホに次いで、一九〇八年に結核の検査薬ツベルグリンが開発され、一九二八年イギリス人細菌学者フレミングがペニシリンを発見し、淋病、梅毒、肺炎の治療が可能になった。一九四四年アメリカの微生物学者ワクスマンがストレプトマイシンを発見し、これが結核の治療を可能にした。日本には一九四九年に、ストレプトマイシンが輸入され、翌年から日本での製造が始まり、結核治療にストレプトマイシンが一般的に使用できるようになった。結核は明治十年代から日本に蔓延し、死亡率は徐々に上がり、明治四十年代には死亡者が十一万人を突破した。大正期に入ってから更に伸びて、十四万人に達した。結核の死亡率は昭和二五年（一九五〇年）まで上昇し続けたがそれ以後急速に減少した。これはストレプトマイシンの使用による効果であるの言うまでもない。以後結核は不治の病ではなくなった。

さて、郭沫若が日本留学した大正三年（一九一四年）から大正一二年（一九二三年）はちょうど明治期以来結核が猖獗をきわめていた時期である。結核による死亡率がそれまでの最高レベルに達していた¹。しかも年齢別で見ると、二十歳代の青年

¹ 「結核死亡数および死亡率の年次推移」『結核の統計』資料編』による。疫学情報センター 結核予防会 結核研究所編

期にもっとも高い死亡率を記録していた²。この頃出版された留学指南書『留学生鑑』³には、わざわざ一章を設けて肺病の注意事項を盛り込んである。この本の第十四章は、「肺病及び脚気の予防」となっている。その中に肺病の予防、肺病の徴候、治療の注意、転地療養と項目に分けて具体的に記述している。

これが当時社会現象となった結核を反映した例である。実際、中国から来た留学のなかにも感染者が出た。郭沫若の同郷の留学生陳龍驥はそのひとりである。一九一六年、陳龍驥は結核で東京の聖口カ病院に入院した。病状は既に末期に入っていた。郭沫若は見舞に訪れ、北里病院への転院を勧めた。彼は友人に付き添って当時結核の権威である北里病院へ移った。しかし、転院の甲斐もなく、友人は亡くなってしまった。友人の死に郭沫若は深い悲しみを受けると同時に、人生の新たな啓示を感じ得た。この辺の経緯は『三葉集』⁴所収田漢宛て書簡に詳しく記している。ともかく、このことは、当時郭沫若の周囲に結核が遍在していたこと示している。一方、郭沫若は一九一九年に九州帝国大学医学部に入学し、医学を勉強した。彼は“亡国病”と呼ばれていた結核について、近代医学の知識を知りえる環境にいた。彼は一九二一年ころ父母宛ての書簡に結核で死亡した親族の部屋の消毒を勧め、消毒薬と消毒方法まで詳細に指示している⁵。結核の流行という環境と近代医学の知識、この二つの要素は、日本留学時代の郭沫若の文学創作と密接に関

わっていると筆者は考える。

二、隠喩としての結核

結核は他の流行病と同様、文学に影響を与えた。ヨーロッパでは、結核病はルネッサンス期から芸術に影響をあたえたが、十九世紀には多くの文学作品に登場した。Alexandre Dumas filsの『椿姫』、シェリ(Percy Bysshe Shelley)の『西風よよめる歌』、オー・ヘンリの『最後の一葉』、トーマス・マンの『魔の山』なども挙げられよう。日本では、明治期から昭和期にかけて、多くの文学作品に結核が登場した。結核患者を描いた作品で徳富蘆花の『不如帰』(明治三二年 一八九八年)は、明治時代にもっとも広く読まれた小説である。泉鏡花の『外科室』(明治二八年 一八九五年)、伊藤左千夫の『野菊の墓』(明治三九年 一九〇六年)、永井荷風の『新任知事』(明治三五年 一九〇二年)、横光利一の『春は馬車に乗って』(大正一五年 一九二六年)から昭和一三年堀辰雄の『風立ちぬ』まで、実に多くの結核文学が生まれた。これらの作品はほとんど、結核病故の悲恋、結核のために世界と距離をもたらす孤独、美しく病み衰えていく命を描くのを眼目としている。このようなテーマは典型的にロマン派のものである。

ロマン派と結核の結びつきはすでにスーザン・ソングタク(Susan Sontag)やルネ・デュボス(Rene Dubos)によって指摘されている。十九世紀頃「肺病でおこった消耗と衰弱はものうげな姿が若い婦人のチャームを増したように、多くのロマン派の芸術家や詩人に魔力をあたえた」と、ルネ・デュボスは

² 近藤宏二『青年と結核』参考。岩波書店 一九四六年。

³ 『留学生鑑』一九〇六年 東京 啓智書社

⁴ 一九二〇年二月一五日田漢宛て書簡参照。『郭沫若全集』第十卷 『三葉集』所収。

⁵ 『桜花書簡』p164 四川人民出版社

『健康という幻想』(『Mirage of Health』)に言う。結核のロマンチックなムードが広がり、結核こそ上品で、繊細で、貴族的であつて、健康はほとんど野蛮な趣味とさえ考えられていた。身体を外から飾る衣服に対して、結核は身体の内側を飾るものという新しいファッション観である。無論実際、結核は大変苦しい病気である。咳、咯血、熱、体力減退体等の症状が繰り返し病人に襲い、最終的に命を奪っていく。患者は青白い顔が紅潮したり、情熱的になるかと思うとすぐにぐったりと無気力になる。「結核は崩壊であり、発熱であり、肉体の軟化である」(TB is disintegration, febrilization dematerialization.)と言われる⁷。まさに結核のこのような症状が文学に多くの刺激を与えたのである。

文学における結核の隠喩はいくつかの側面をもっている。

1、愛の隠喩。スーザン・ソング(D Susan Sontag)が指摘したように、「結核の場合、外に現われる熱は内なる燃焼の目印とされる。結核の隠喩はまず愛を描くのに利用された——“病める”愛とか、“焼き尽くす”情熱といったイメージがそれである」。(Fever in TB was a sign of an inward burning; The use of metaphors drawn from TB to describe love—the image of a “diseased” love, of a passion that “consumes”——long antedates the Romantics movement.)⁸ この「結核は愛の力の変装として利用されたのである」。

⁶ ルネ・デムボス『健康とこの幻想』(『Mirage of Health』) 田多井吉之助訳 紀伊国屋書店 一九八八年 p 186

⁷ スーザン・ソング(D Susan Sontag)『隠喩としての病』(『Illness as Metaphor』) p 13 富山太佳郎訳 みすず書房 p 18.

⁸ 同上 p 62. (『Illness as Metaphor』) p 20)

2、死の品位を高める。「下卑な肉体を解体し、人格を霊化し、結核をめぐる空想を通して死を美化する。結核の方はあてやかな、たびたび抒情詩的な死につながるものと考えられた。」(With the TB death, which dissolved the gross body, etheralized the personality, expanded consciousness. It was equally possible, through fantasies about TB, to aestheticize death. TB was thought of—as a decorative, often lyrical death.)⁹

3、自我の新しい態度の比喻。結核は身体の内側を飾るものという考え方から、内面の意志を語る言葉となり、自我を表現する手段ともなった。人間の熾烈な欲望や過剰な感情を病によって白日に開示することができる。従つて「結核は病める自我の病気」(TB was the disease of sick self)とも言われる¹⁰。

結核は情熱の病気と同時に抑圧の病気とも見られていた。病氣において、しばしば強い欲望の抑圧や、伝染、隔離、恐怖による抑圧を描き出す。スーザン・ソング(D Susan Sontag)が指摘する、「病気の隠喩は社会がバランスを崩していることをではなく、それが抑圧的であることを言うために使われる。心と頭、自発性と理性、自然と人為、田園と都会などを対置するロマン派の修辭法の中には絶えずそれが登場してくる。」(Disease metaphors are used to judge society not as out of balance but as repressive. They turn up regularly in Romantic rhetoric which opposes heart to head, spontaneity to reason, nature to artifice, country to city.)¹¹ 結核は近代科

⁹ 同上 p 82. (『Illness as Metaphor』) p 20)

¹⁰ 同上 p 102. (『Illness as Metaphor』) p 102)

¹¹ スーザン・ソング(D Susan Sontag)『隠喩としての病』 p 110.

学の発展と相俟って、文学の世界において、近代自我の表出に大きな役割を担っていた。

三、郭沫若の「残春」における結核の意味

郭沫若は来日した二年後に同郷の留学生に結核患者が出た。陳龍驥である。陳は東京の聖ロカ病院に入院していたが、郭沫若は北里病院への転院を勧め、かつ陳に付き添って転院した。しかし陳は間もなく亡くなった。郭沫若は一九二〇年田漢(Tian Han)宛ての書簡に細かく記述している。「彼は車に寝ていて、車輪が揺れるたびに乾いた咳をした。顔面は大理石のように蒼白く、ときどき桃色に血潮が差してくる。涙で潤んだ眼は無限な希望を含んで、しきりに私を眺める。ああ、あの可哀相な様子は、生涯忘れられない。」¹² 結核患者の様子及びその死を身近に見るといふ体験は、青年郭沫若に、結核の恐ろしさ、命のはかなさを、残酷にも感じさせた。しかし、一方、この残酷な体験は彼に予期せぬ恋を齎した。聖ロカ病院で彼は看護師の佐藤富子と出会ったのである。郭沫若はこの出会いを「bitterish sweetness」と言った。田漢宛ての書簡に、「神様が私を憐れんで、よい友を失った後、やさしい彼女を賜った。私たちはそのころからよく文通して、兄妹と呼び合うようになった。」¹³ 郭沫若と異国女性との恋愛は、友人の死から始まる。この体験は、彼にとつて、後の彼の文学にとって重要な出来事である。つまり、結核は、彼には二重の意味をもつ。苦痛、残

酷な死と甘美な恋愛である。この二重の意味は彼の文学にたびたび表現される。医学・文学・身体という課題を郭沫若文学において考察する時、結核に纏わるこの二重の意味こそが重要である。

郭沫若が初めて結核を扱った作品「残春」(一九二二年)である。主人公愛牟(Ai Mu)の同郷の留学生が帰国途中精神異常になり、門司で海に飛び込んで自殺を図ったが助けられ、門司の病院に入院する。博多にいる愛牟は友人白羊君に案内されて見舞に行く。その病院で看護婦S嬢に恋心を抱く。二人の逢瀬と愛牟の妻の発狂、子殺しの事件は夢の形で描かれている。作品において夢は重要な効果を果たしている。しかしこの作品の重要なフアクターは結核病ではる。夢に入る前に既に結核を暗示するいくつかの要素が見られる。

1、自殺未遂の友人が入院中の病院は「養生医院」という。「養生医院」は明治から昭和中期まで、日本各地に存在した。

もともと結核患者を収容する病院であった。前出郭沫若が田漢宛ての書簡に、友人の陳君を聖ロカ病院から北里病院に転院させた件では、「養生院に移り、北里で治療してもらおう勧めた」とある。この「養生院」は北里大学の創始者北里柴三郎が明治二六年に開設した日本最初の結核医療の施設である。北里柴三郎は明治一八年にドイツに留学し、結核菌の発見者であるコッホに師事した。帰国後、結核を含む伝染病の研究と治療のために、福沢諭吉の援助を得て、東京白金で「土筆ヶ岡養生園」を開設した。大正三年(一九一四年)に「土筆ヶ岡養生園」の隣に「北里研究所」現在の北里研究所付属病院を設立し。郭沫若が陳君に転院を勧めたのは一九一六年であるので、まさに「北里研究所」が開設して2年後のことである。彼はその時すでに結核の最先端治療機関を知っていたのである。従って「残春」

(『Illness as Metaphor』 p.73)

12 『三葉集』『郭沫若全集』所収十五巻 p.40。

13 『三葉集』『郭沫若全集』所収十五巻 p.40, p.41。

に見られる「養生医院」は結核を暗示していると取るべきであろう。

2、看護婦S嬢は頬が桃色に染まっている。

これは「処女の誇り」とすることもできるが、同時にこれはまた結核患者の普遍的な症状でもある。

3、白羊君の話では、看護婦S嬢は肺尖がよくない、癆症の恐れある。

後の夢の中ではつきりと肺結核と描かれる。

4、S嬢の父母はアメリカで死んだ、という。

夢の中でS嬢の父母は肺結核で死んだとある。結核の遺伝説が出る。

この小説はこのような伏線から、夢の世界に入り、淡い恋愛ストーリーを展開する。看護婦S嬢の結核症状は夢の中に明確に描かれている。寝汗、体力減退、痩せる、食欲不振、月経失調。これらの症状から医学生Sの愛人は初期の結核であると分かった。更にS嬢の腺病質の体格や結核の遺伝性、結核に関する医学的及び迷信的な捉え方を作品に盛り込んでいる。S嬢の身体については次のような描写がある。

時々眉を八の字に寄せて、桃色に頬を染める。

彼女の顔色は異常に蒼白に見えた。彼女の肉体は大理石の彫刻のようで、露わになった両肩は殻を剥いた荔枝のようだ。 14

このように、結核の身体的な特徴を艶やかに描くことによつて、S嬢の美しくしさを強調する。つまり、結核というフアク

14 「残春」 p 28 p 29 p 31 『郭沫若全集』第九卷所収

ターにおいて恋愛を暗示する。「残春」の重要な構造は夢にある。郭沫若は一九二三年に「批評と夢」という一文に「残春」の構造を説明している。

「残春」の着眼点はストーリーの進行ではなく、心理的描写にある。私は心理に潜在している意識の流れを描いたのである。「残春」のクライマックスは夢である。 15

つまり、郭沫若がこの作品で書こうとしたのは、看護婦S嬢に対す愛人の恋愛感情——一種の抑圧された心理である。それを彼は「意識の流れ」を言っている。文学手法としての「意識の流れ」は James Joyce 「ユリシーズ」(Ulysses) によつて打ち出されたものであるが、その方法は「内的独白」(Interior monologue) と言う。心の奥深い所に起伏する思念を連写的にありのままに描く、ということである。「ユリシーズ」の雑誌掲載は一九一八年で、出版は一九二二年である。日本への伝来は、一九一八年野口米次郎の評論「画家の肖像」(雑誌「学灯」一九一八・三)が最初である。一九二五年、堀口大学の「小説の新しい形式としての内的独白」(雑誌「新潮」一九二五・八)が本格的な紹介が出る。「ユリシーズ」の日本語訳は一九二九年に出版される。このように見てくると、一九二二年の時点で書かれた「残春」は「意識の流れ」描写の先駆けともいえよう。しかし、実際、郭沫若は James Joyce 「ユリシーズ」及び「意識の流れ」について具体的にどのように言及したか、という問題については今後の研究を待たなければならない。彼の言う「意識の流れ」はむしろフロイトの精神分析や心理学の方により多く傾いてい

15 「批評と夢」 p 236 『郭沫若全集』第十五卷所収

ることは、彼のいくつかの論文から伺える。

「残春」において、郭沫若は、諸要素の暗喩、連想と全体の有機的統合性を重視した。例えば以下のような諸要素の関連がある。

愛牟は医学生 → 結核に医学的な知識をもつ。S嬢に注目される。

愛牟の妻 → 恋愛の障害 (抑圧)

白羊君の存在 → 恋愛の障害 (抑圧)

友人の発狂 → 妻の発狂

S嬢に打診 → 肉体の接触

血のような夕焼け → 殺された子供の血

Sirens の連想 → Medea の悲劇

落ちた赤い薔薇の花弁 → S嬢の運命

タイトル残春 → S嬢の可憐さ、青春のはかなさ

夢の形式とこれらの諸要素の隠喩は叶わない恋愛を描くために効果したが、しかし、恋愛感情を昇華させるために、結核は決定的な意味をもつ。医学的知識でさえS嬢の可憐さと恋愛感情の誘発に効果している。結核を告白するS嬢と愛牟には次のようなやり取りがある。

「では、愛牟先生、私を診察してくださいな。」

「僕はまだ竹の子のような学生ですよ。」

「あら、謙遜なさらなくてもいいのよ。」そう言つて、女はゆつくり上半身を露わにして、僕に近づいてきた。

彼女の肉体は大理石の彫刻のようで、露わに露出した両

肩は殻を剥いた荔枝のようだ。・・・・・¹⁶

16 「残春」 p.31 『郭沫若全集』第九巻所収

ここではS嬢は切実で、大胆に愛牟に迫って来る。ソンドーク (Susan Sontag) も認めたように、「結核とは情熱過多から来るもので、官能に感溺する人々を悩ますもの。結核は情熱の病氣として有名であると同時に、それと同じ程度に、抑圧の病氣ともみなされていた。」(TB was thought to come from too much passion, afflicting the reckless and sensual. As much as TB was celebrated as a disease of passion, it was also regarded as a disease of repression.)¹⁷ S嬢は愛牟に対する感情を結核というファクターを通して表現している。S嬢に対して愛牟は感傷と同情を感じずにいられない。つまり、夢の中で、結核病は更に一つの特別な心理環境を構成し、登場人物の内なる告白を切実に表出するのに効果したのである。

結論

結核は他の伝染病と同様、近代以来、文学の世界で隠喩としてその役割を果たしてきた。医学・文学・身体という論題で郭沫若文学を考える時に、ここには近代文明と近代精神が交叉し、凝縮してくる。明治時代の社会病としての結核は、彼の文学作品に重要なファクターとなった。医学生としての知識もこれに役立った。「残春」において、結核についてのリアルな描写と隠喩的表現は彼のロマン的な作風を具現している。恋愛や自我意識を結核というファクターによって表現しようと試みた好例と言える。

17 ソンドーク (Susan Sontag) 『隠喩としての病』 p.30。『Illness as Metaphor』 p.12)

一九二四年二月中華学芸社第一屆年会における郭沫若の講演を巡って

坂井洋史

近年来急速な発展を遂げつつある、中国における旧版書籍、逐次刊行物のデジタル・データ化とアーカイヴのインターネット上での無償公開は、中国現代文学研究を大きく前進させるものと言えは聞こえは良いけれど、実際の所、これまでの研究、特に文学史的なアプローチを採る研究には、その大幅な見直し、もしかしたら全否定にすら繋がりがかねない、革命的な変化をもたらしつつあるようだ。私のように、異なる年代や地域、集団に属する複数の作家とテキストを見渡して、そこに何らかの「意味」を通底させたいと考えてきた異域の人間の、この変化に直面しての感慨は、痛し痒しなどという余裕交じりのものではなく、日暮れて路遠し、殆ど絶望と言って、決して大袈裟ではない。もっとも、そのような感慨もしくは絶望は、何やら大それたことを考えようとするからこそ生じるのであって、長らく気に懸かっていた事実がふと判明したり、詰まらぬ事柄であれ何かしら「発見」があったり、或いは「大それた思考」に繋がりそうな予感を覚える、ちよつとしたヒントを見つけたりするときは、矢張り何と言つても嬉しいものであって、その点では、今日の「革命的な変化」の恩恵に浴することも少なくともない。

この小文、大方の参考に供すべく、デジタル・アーカイヴを瀏覽する内に見出した、郭沫若に関する文字通り微細な事実／

疑問を報告するもので、郭沫若専門家ならぬ私としては、差し当たってそれ以上の意図はないのだが、如何に些細な事柄であれ、然るべき興味や関心が、それを然るべき枠組に配置すれば、然るべき意味を開示してくるとは言うもおろか、それはもしかしたら「大それた思考」を補強することもあろう、「資料」の値打ちとはそもそもそういうものであると、重々承知した上での小技である。

※ここで所謂「デジタル・アーカイヴ」は、「大学数字図書館国際合作計画 (China Academic Digital Associative Library, CADAL)」を専ら利用した。 <http://www.cadal.zju.edu.cn/index>

○

郭沫若『創造十年續篇』の冒頭に記されるのは、一九二四年三月、中華学芸社の第一回年次大会が杭州で催された折に、幹事として「文藝之社會的使命」と題する講演を行うも、しどろもどろの失敗に終わった一件の回想である。当時、創造社では、郁達夫が離脱を宣告し、また五月に終刊となる『創造週報』を巡る紛糾があり、郭沫若自身も四月には生計の考慮から日本に渡るなど、身辺多事であったにも拘らず、この杭州行を、少なからぬ篇幅を以て仔細に記述しているのは、当時の「失敗」が郭の記憶に深く刻まれていたからだろう。

『創造十年續篇』はこの杭州行を「三月中旬」と記すのみ。郭の年譜として今日恐らく最も周到な三巻本の襲継民、方仁念『郭沫若年譜』(天津人民出版社、一九九二年十二月第一版第二次印刷) 上巻もまた「中旬」と記す。王訓昭、盧正言、邵華、蕭斌如、林明華編『郭沫若研究資料』(知識産権出版社、二〇一

○年三月) 上巻所収の盧正言「郭沫若年譜簡編」は「簡編」を謳いながら、講演の日付を「三月十六日」と明記している。

この日付に関しては、中華学芸社の行事であるからには、その方面の記録から確定出来る筈と、該会機関誌『學藝』をウェブ上で探し当てて見れば、果たして第五卷第一〇号(一九二四年三月三十一日発行)の巻末に「社報」欄があり、その「総事務所報告」に第一回年次大会の模様が報告されている。その記載に拠れば、大会は一九二四年三月十五日午後一時から杭州の浙江省教育会で挙行され、杭州の会員と国外を含む外地の会員併せて六十名が参加したとある。十五日の午後は会務に関する報告、討議があり、晩は青年会に場所を移して晚餐会が催された。報告は続けて「翌十六、十七両日、参加社員の多数は、更に杭州の各学校に講演に招かれた。」と記して、その詳細を「B. 講演」に列記している。そこには、「十六日午後、浙江省教育会において、聶湯谷君が『最近之德國』を、周頌久君が『相對性原理』を、郭沫若君が『文學之社會性』を講じた。」とあり、これは盧正言「郭沫若年譜簡編」の、講演は三月十六日に行われたという記述と一致する。

主催団体の公式記録である以上、この日付に関しては最早疑いを差し挟む余地などないようなものだが、しかし、念の爲にと曆を捲ってみれば、一九二四年三月十六日は実は日曜日だったと分かり、これは『創造十年續篇』の記述と一致しないのである。少し長くなるが、郭沫若の回想を確認しておこう。

会場は非常に広く、階上階下に恐らく一千人以上を容れる

ことができたろう。ところが意外なことには聴講者がさっぱり来ないのである。一時になっても、ほんのちらほらと幾人か来たきりで、せっかく来た人々も後から誰も来ないので、まもなくどんどん帰ってしまった。「……」「僕は講演はできないと、はじめっからいつてるじゃないか。それに聴講者が集まらないのは、日曜日でみんな家に帰るものは帰り、遊びに行くものは行っただからだと僕は思うね。君は僕に出ろというが、出たって人は集りゃしないよ」「……」人々はみな講演会の失敗の罪を僕に帰した。僕も友人たちの詰問と勧誘に耐えかねて、とうとう決心して、サーカスの道化役になることを承知した。結局講演会を翌日の午後に改め、僕を一枚加えて、『文芸の社会的使命』について講演することになって、もう一度杭州の各紙に広告を出し、さらに教育会の後援により杭州各学校に翌日は半休にする様に要請し、事はそのように決定した。(松枝茂夫訳に拠る。以下引用は同じ。『創造十年、続・創造十年』、「岩波文庫」版、岩波書店、一九七六年四月第四刷)

つまり、十六日日曜日の講演は中止になり、翌十七日月曜日に日延べされたということで、『學藝』の記述と矛盾する。当初予定の講演会に人が集まらず、やむなく翌日に延期するという、尋常ならざる事態そのものに関しては、事後の回想とはいえ、よもや郭沫若の記憶違いとは考えにくいから、『學藝』が何らかの理由から、当初予定の日付をそのまま記録に残したと考えれば納得はゆくが、直ちに断定することは無論出来ない。

もう一つの問題は、講演題目である。『學藝』の記録は「文學之社會性」とし、恐らくこの記述に拠つたらしい盧「年譜簡編」もこの題目を採る。しかし、郭沫若自身はこれを「文藝之社會的使命」としているのだ。

ところが、ここに中華学芸社に会場を提供した浙江省教育会の刊行物『浙江省教育會月刊』第一期（一九二四年八月）をデジタル・アーカイヴ中に見出すことが出来、該誌掲載の「浙江省教育會十二年度會務記要（自十二年七月起／至十三年六月止）」という会務日録の、（民国十三年）三月の記録を見れば、そこには「十七日 請周頌久先生講（相對性之原理）郭沫若先生講（文藝之社會的意義）聶湯谷先生講（最近之德國）」と記されているのである。郭沫若の回想の信憑性を裏付け、講演日を最終的に確定するには、郭記す所の、講演日の変更を告知した新聞広告まで確認したいものだが、これだけの情況証拠でもほぼ十分であろう。講演題目については、この資料が第三の題目「文藝之社會的意義」を挙げたことで、謎が却って深まった。「文學之社會性」、「文藝之社會的使命」、「文藝之社會的意義」の三種の内、いずれが実際に掲げられた題目だったのか、これは確定すべく、当面決め手はない。

二日目の月曜日には、各学校に人を派して話をさせることになつており、その割当ももう大体できていたが、ニカ所だけまだ人がきまっていなかった。一カ所はたしか工業学校で、もう一カ所は蚕業講習所だった。役員たちは僕の来方の遅かったことをとがめ、わざと回避するつもりだったのだろうか

浙江省教育會月刊

- 一 本會會長李傑致職宣言
- 二 教育會之責任
- 三 相對性原理
- 四 文藝之社會的意義
- 五 浙江之文化
- 六 本會建築會所記
- 七 浙江省教育會十二年度會務記要
- 八 關於學校安全問題的三個建議
- 九 抗縣立第五小學校現況
- 一〇 本會第十三屆常年大會紀事
- 一一 公履摘要



行印月八年三十國民
類紙聞新為認號掛准特政郵華中

浙江省教育會月刊

點・每一百年移前五百七十四秒・（孤懸）內有五百三十二秒・係受他行星引力之影響而前進・尚有四十二秒不知受何種作用之結果・安斯坦用精妙之數量測得之值・為四十二秒・此引新理論之所以大告成功也・安斯坦根據引力新論・推得恒星發出之光線・經過日球之範圍時・必受日球引而彎曲・因光有重量（安斯坦平均主準）照半額萬有引力法則・其彎曲度平均值・為〇七五秒・（弧度）照安斯坦引力新論計算・其彎曲為一・九五秒・此安氏在一九二一年之豫言・至一九一九年英國天文學家・羅許計五月二十九日・地球上有一日食・食・在巴西北部所發拉爾・一在非洲普林西島・英國天文家・為考真理・據羅許之觀念・先期編日食觀察隊・分爲兩處作大規模之觀測・並日食時間・計六分鐘零八分・詳細觀察・測結果・（一）知恒星之光・確受太陽引力而彎曲・（二）知測得之值・據所發拉爾報告為一九八秒・據普林西島報告為一六二秒・即兩種平均值為一・八秒・安斯坦理論為一・七五秒・與實際最近此光線非直行之學說・最為精確・而安氏之名乃大著於世界矣・安斯坦相對性原理・須用極高深數學方能證明・彼曾自言世界上聽了解此項學說者・恐不滿十八人・似此高深之學理・決非尋常治物理者所能講解說明・予亦不進入云云・然當促進研究學術之機會・極多數予咸知探討研究之未可成想・日進有功・而科學大革命・即此物其兆矣。

郭沫若氏啟

文藝之社會的意義

兄弟剛繼到地遊玩・看見那幾許名學校・旁有小侯・一派天地的景色・就可開我眼界・而且

て、僕にぜひ一カ所やって欲しいといった。僕は仕方なしに、

学生の少しでも少ない蚕業講習所の方を選んで話をしに行くことにした。工業学校は殷汝耕が受持った。

記録には工業学校、蚕業講習所のいずれの名前も挙げられていない。郭は「講演失敗後、また鄭君に伴われて蚕業講習所へゆき何十分か講演をやった」と記すが、果たして日程を変更して十七日午後には教育会で講演を行っているのであれば、蚕業講習所における講演は当日の晩に行われたと考えるのが自然である。日付の件に見るように、『學藝』の記録はとも信用が置けないようだが、『創造十年續篇』の記述とここまで齟齬を来すというのは、一体如何なることか。こちらについては、どちらが誤っているか、目下の時点で材料を欠くので、ここまでする。

さて、郭沫若の講演日を三月十七日月曜日と推定する有力な根拠となった『浙江省教育會月刊』であるが、会務日録もさることながら、実は講演記録を掲載していることにより注目された。周頌久の講演録「相對性原理」（日録では「相對性之原理」とされている）及び郭沫若の講演録「文藝之社會的意義」は該誌第一期に、講演会では同時に行われた聶湯谷「最近之德國」の講演録は、翌九月発行の第二期に掲載されている。郭沫若はこの時の講演内容を後日文字化して公表していないようなので、その意味でもこれは新鮮な材料と言えぬでもなからう。郭自身はこの講演を、「どんぶり一杯の泥水をくみ、それに米の粉、うどん粉、豆の粉ないしは石灰粉を入れて、やたらに掻きまぜて作った糊みたいなので、それをその満堂の聴衆の頭の上から浴びせかけたようなもの」と形容しているのだが、それはこの

千字余りにまとめられた抄録（に違いない）からも、実に良く伝わってくる。『創造十年續篇』では講演前の気散じ遊覧の様子が詳しく描かれていたが、遊覧の感想を枕に置き、前の講演者である周頌久の講演内容を引き取る形で、科学の実用性と対照させながら、文学の功利性を説こうとするなど、講演の構成と展開に苦心している姿が露わなのだ。ここに窺う限り、この講演、殆ど意味不明と言うに近い、確かに混沌を極めたものである。『創造十年續篇』の記述も、あなたがち郭一流の誇張とばかりは言えないようである。内容についてはこれまでとする。

最後に附言しておく。三卷本年譜の当該項目には、「講題亦爲『文藝之社會的使命』とあるが、この記述は『創造十年續篇』に拠っている旨明記されているので、題目が、「文藝之社會的使命」を採るのも諒解出来る。「亦」の一字を置くのは、一九二三年五月二日に上海大学で行った講演の題目がやはり「文藝之社會的使命」であったことを意識したものである。しかし既述のように、杭州における講演の題目については、未だ確定し難いから、「亦」字が活きるか否か、そこは留保が必要である。

上海大学における講演は、後に『文藝論集』に収録されたので、容易に参照出来るのだが、こちらは首尾一貫した、明晰なメッセージを要領良く伝えるものである。或いは文字化に際して、かなり手を加えたのかもしれないが、それはともかく、一年も経たぬ内に、ほぼ同じ内容の講演をするのであれば、上海大学の講演を煎じ直せば「失敗」は回避できたらうに、何故そうしなかったのか。謎と言え、日付や講演題目のあやふやさなどより、そちらの方が余程謎かもしれない。

『蔡文姫』は大漢族主義の作品か

—— 一九八〇年『草原』に現れた論議のこと ——

杉本達夫

『蔡文姫』は一九五九年、建国一〇周年を記念して作られた劇であり、北京人芸によって上演された。この年、国内では大躍進政策の失敗による混乱、チベットの反乱、彭徳懐らの「反党集団」問題があり、国際的にはソ連との関係の悪化が始まっている。それから一九年後、文革のいわゆる失われた一〇年を経た一九七八年に、再び北京人芸によって上演された。この時、文革の全面否定と改革開放の動きはすでに始まっている。『蔡文姫』はさらに翌七九年に、北京電影製片廠によって映画化された。昆曲の演目にもなったという。

本劇創作の意図を郭沫若は、「曹操の評価を改めること」にあると言う。当時、史学界では曹操の評価をめぐる論戦があり、文学の分野では、「胡笳十八拍」の作者は誰か、詩としていかに評価するかをめぐる、議論が盛んだった。郭沫若はそこに自分の見解を劇で示したと言えるだろう。すなわち、曹操は傑出した政治家であり、文人であり、英雄であって、従来の敵役イメージを改め、正面から高く評価されるべきこと、また、「胡笳十八拍」の作者は蔡文姫であると断じ、蔡文姫が優れた詩人であり文人であって、世に大きな貢献をしていることを、高らかに歌い上げているのである。郭沫若はまた「蔡文姫はわたしである」と述べている。匈奴の地で一二年の歳月を過ごしたのち、

漢土での使命のために、家族と別れて漢土に帰る蔡文姫を、家族を日本に残して抗日戦に投じた己に重ね合わせ、感情移入するのである。わたしが初めて『蔡文姫』を読んだ時、最後の場面に感じたのは、「これは毛沢東賛歌ではないか」ということだった。全員で曹操を讃える場面に、「毛主席万歳」を連想したものだ。曹操についても蔡文姫についても、ろくに知らない若造の印象であったが。

初演時も再演時も、郭沫若の意図は一般に好感をもって迎えられ、劇は曹操の人物像を一新するとともに、美しい民族団結のありようを描き出した、と評価されたのであろう。表に現れてくる論評としてはそうなのであろう。だが、表に現れぬ声、現れることを許されぬ声、長く地下に渦を巻いていたらしい。少数民族地域の地下で。

改革開放の時代に入って、次つぎ文芸誌が生まれた。各地の作家協会の機関誌が復活したほか、新たな大型文芸誌がいくつも誕生した。そんな中の一つ、内蒙古作家協会の機関誌『草原』に、八〇年に入って唐突に（わたしには唐突だった）、『蔡文姫』への激しい批判が現れた。劇には大漢族主義、民族蔑視の意識があらわであると指弾するのである。激烈な見解には、共感が生まれる一方、当然ながら異論や批判が現れる。わたしの見限り、『蔡文姫』をめぐる議論は八〇年の前半で終わってしまった。議論が時を置いて再燃したのか、あるいは別の場所で続いていたのか、わたしは知らないままである。

『草原』八〇年前半の関連論文を挙げれば、以下の通りである。論文はそれぞれ短い、しかし論点を一言に縮められるも

のではない。要約の不手際はお許し願いたい。ここに記すのはただの紹介であって、論評はしない。議論の理解を助けるべく、五幕の劇の梗概を記せばよいのであろうが、長くなるからやめる。

八〇年第一期 A 查洪武 「情难容 理不该 —— 对话剧『蔡文姬』处理古代民族关系问题的异议」

過去の民族関係をいかに処理し表現するかという、大衆の間に議論のある重要問題が、学界で無視され、長らく隠されたままになっている。蔡文姬は漢民族文化への貢献が高く評価されているが、匈奴文化には何ら貢献していない。「胡笳十八拍」は少数民族への侮辱、蔑視の言葉に満ちており、匈奴生活への理解と愛情を欠く。蔡文姬の帰国は曹操の政治目的を満たすためであり、その結果、左賢王一家を崩壊させた。左賢王は蔡文姬の犠牲である。郭沫若は「南匈奴は『帰化』した」と書くなど、大漢族主義の意識を露呈している。不平等を平等と称し、侮辱蔑視を団結友好と称えるなど、許せるものではない。

八〇年第二期 B 李蕙芳 「感情和责任的巨大冲突 —— 历史剧『蔡文姬』主题浅见」

蔡文姬は左賢王と二児への愛情ゆえに、別れを悲しみ苦しんでいる。蔡文姬の苦悩は社会的責任の大きさゆえに深まっている。この愛情と責任との衝突こそが、この劇の主題である。左賢王は蔡文姬を、漢朝文化に貢献すべく励まし送り出したのであり、爽やかで真心の人である。劇は漢朝と北方少数民族との

友好団結の歴史を生き生きと描き出し、両族人民の永久の友好の願いをよく表している。

八〇年第三期 C 舒振邦 马耀圻 吉发习 「文姬归汉宣扬了民族团结吗? —— 从关于『蔡文姬』的争鸣谈起」

劇の主題は民族団結と友好を歌い上げることか。曹操は民族団結と友好の発展の意味が分かっているか。いずれもノーだ。曹操の行為は漢匈団結を破壊する。蔡文姬も心にあるのは一二年の悲嘆、一二年の思郷、二児への愛着のみで、左賢王と匈奴への愛情はない。民族団結の意義が分かるはずがない。劇中の曹操は多面的な評価によって、新たな人物像となり、作者の意図は達成されたが、ここにあるのは完全なる曹操賛歌であって、民族団結は寸毫もない。少数民族の観客はすべて、左賢王の悲運に同情するであろう。

八〇年第三期 D 李賜 「从「我这一家人……」谈起——看『蔡文姬』有感」

劇は左賢王夫婦の物語でもあり、一家離散の悲劇でもあるが、蔡文姬の足跡に漢匈民族間の深い情誼を見ることがができる。董祀による説得の結果、蔡文姬は大義のため、民族文化への貢献のために帰国する。左賢王は妻を励まし送り出し、友好の誓いを立てる。鮮卑との戦いの後死亡するが、自身の望みが実現したのであるから、安らかに眠れるであろう。郭沫若は中華民族の歴史が各兄弟民族による共同の産物であるという真理を、生き生きと描き出している。

八〇年第四期 E 何守中『蔡文姬』の主題及其效果

劇の中心人物は、実は四幕以降に登場する曹操である。曹操の思想が物語の全局面を貫き、全人物を支配している。劇の主題は漢魏文化を発展させた民族英雄たる曹操への賛歌である。だが郭沫若は蔡文姬や曹操への感情移入のあまり、かれらの大漢族主義意識を見落とした。郭沫若自身にも大漢族主義の影響が残っていて、民族団結に不利な効果を生んでいる。郭沫若は劇の中で史実を変えているが、史劇は偏愛によって事実の本質を変えてはならない。とはいえ劇は観衆に、民族団結と祖国統一の重要性を痛感させる力を持つ。

八〇年第六期 F 任貴「讨论不应忘记作品——也谈历史剧『蔡文姬』」

議論は作品自体の分析をなすべきであって、歴史への推論でものを言っただけではない。作品を分析するならば、蔡文姬個人の悲しみと喜びの中に、本民族の安定、兄弟民族関係の友好、民族の文化事業への貢献を願う大なる要因が染み透っている。主人公はあくまで蔡文姬であり、蔡文姬に作者の深い思いが注ぎ込まれている。蔡文姬も曹操も、前提にあるのは友好団結だ。史実と史劇を混同してはならない。史劇には虚構と想像が許される。作品を忘れ、史籍のみをかざした議論は間違っている。

論文A Cに代表されるような主張は、地下のマグマのごとくに溜り滾っていた感情が、改革開放の空気の中で一気に噴出

したのであろう。論文Bはより高い立場の人物による、打ち切りのための総括のように感じるが、それにしても、大漢族主義だの民族蔑視だのといった、批判の根底にある、批判者にとっては根源的な指摘を、正面から取り上げてはいない。(改行)

Cに限らず、議論の過程で、そういう批判自体が民族の不和を煽り、団結を損なうのだという反批判が、どこかで強く出ると思ったが、少なくともわたしは目にしていない。しかし報道されない場所で、個別にあるいは組織的に、そういう批判を抑える反批判的指導が、強くなされたに違いない。

魯迅は日本に留学した時、友人と憂国の語らいをして、民族の病根は二度も異族の奴隷になったことに発する、と考えたという。民族とは当然漢族であり、異族の国とは元であり清であり、中華民族の構成員である。元や清による支配が漢族の病根を生み出したのなら、漢族の支配下に長く長く生きる諸民族は、自民族の病根を漢族による支配に求め、そのように発言しうるのだろうか。

ある事実、ある作品に何を感じ取るかは、受け手の意識次第で正反対になる。歴史上の抗争で、漢族にとつての英雄は、相手の民族にとつては許しがたい敵なのである。例えば、一九四三年末に上海で、劇『文天祥』（呉祖光『正気歌』による）が上演され、刑場に赴く文天祥が「正気歌」を歌う場面で、観衆が熱狂した。この時の熱狂は歴史に託した、抗日の情の屈折した爆発であったが、文天祥が主人公であるからには、当然蒙古が

敵になる。そのころに満州国で学んでいたある先生から聞いたことであるが、何人かの生徒が芝生で車座になって談笑していたとき、ひとりがふと鼻歌で「正気歌」を歌った。すると別の一人が激しく怒り、涙を流して抗議した。歌った生徒は漢族で、怒った生徒は蒙古族だった。これなどは民族感情のもつれの象徴的な話である。だが場面がもし上海や重慶だったら、怒った生徒は怒りを飲み込むしかなかったのではあるまいか。

中国は多民族国家である。周辺に位置する少数民族は、すべて兄弟民族である。とはいえ、兄弟はみな長兄の巨大な傘の下にある。影の中にある。長兄は事ごとに兄弟たちに指図する。ラティモア『中国と私』（磯野富士子訳、みすず書房）によれば、かの北京無血開城の功労者たる傅作儀が、「蒙古人は人間ではない。ブタだ」と放言していたそう。周辺諸民族に対する類似の意識の持ち主は、多数に上っていただろう。建国から六十六年、『草原』誌上の論議から三十五年、長兄からそういう意識が消えているか。完滅は期し難いとしてもより希薄になること、兄弟の意識の底に怒りのマグマがより激しく滾らないことを、わたしはよそ者ながら切に願う。

なお、全人代や全国政協会議に出席する少数民族代表は、多くが民族衣装で登場するが、そういう場面をテレビで見るとびに、わたしははなはだ違和感を覚える。こういう際の民族衣装は、民族の誇りの表明ではなくて、逆に国政の輪の外にあることの表示であるように感じられるのである。

二〇一五、九、六

郭沫若と傅抱石（一九〇四・一九六五）

— 日本における交流 —

成家徹郎

傅抱石は一九三二年の九月ころ始めて日本に来た。そして十二月に帰国した。この時期、郭沫若に会うことはなかった。一九三三年一月にまた日本に来た。この時はじめて郭氏と面識を得た。

郭沫若が文求堂に宛てた書簡の中に、傅抱石に言及するものが五通存在する。『郭沫若致文求堂書簡』（文物出版社）またアジア・アフリカ図書館郭沫若文庫（三鷹市）には、傅抱石が郭氏に謹呈した印譜『傅抱石所造印稿』が所蔵されている。それには謹呈したときの日付が書かれている。

傅抱石に関する著作や年譜がこれまでたくさん出版された。しかしそれらを見ると、日本滞在中の活動に関する年月が諸本によって食い違っている。それらの著者はまだ郭沫若文庫蔵『傅抱石所造印稿』を見ていない（存在を知らない）ように思われる。

また、郭氏の致文求堂書簡もたいてい月日のみで年が書かれていないものが多い。『郭沫若致文求堂書簡』の編者は書簡の内容を見て前後関係を考えて、古い順に配列したが、この配列に矛盾がある。編者も郭沫若文庫蔵『傅抱石所造印稿』の存在を知らないようだ。

傅抱石の恩師・帝国美術大学（いま武蔵野美術大学）教授・

金原省吾の日記にも傳氏に関する記述がたくさんある。

いま、傳抱石に言及している致文求堂書簡五通と『傳抱石所造印稿』に記された日付および金原日記を併せて考慮し、傳抱石が日本にいた時期における郭氏との交流について考察した。

そうすると、傳氏の日本における活動の年月についてかなり正確に確定できる。年月が記されている郭沫若文庫蔵『傳抱石所造印稿』は、致文求堂書簡五通の前後関係を考える上で決定的役割を果たす。

傳氏は帝國美術学校在学中の一九三五年六月に帰国し、それ以後日本に来ることはなかった。なお傳抱石の娘・傳益瑤女史は日本に居住し画家として活躍されている。

一九三二年秋（九月ころ）。

傳抱石、初めて日本に来る。あちこち見学し、資料収集の活動をした。しかし資金が乏しいので長く日本に居るのは困難だった。

十二月

郭沫若に会うつもりで市川に向かったが、途中で警察に拘束された。（葉宗鎬『傳抱石年譜』（増訂本）による）

一九三三年一月

傳抱石、郭沫若と初対面。

一九三三年春頃

傳抱石、帰国。この時期、『傳抱石所造印稿』の表紙題字、扉題字を、呉梅と黄侃に依頼した。

一九三三年秋冬の頃

傳抱石、日本に来る。

一九三三年

致文求堂166号書簡（十一月十八日）。

篆刻家傳抱石（細字を良くほる、また絵にもたくみである）がそちらへ尋ねてお話ししたいとのこと。また河井荃廬氏に会いたいと言っているので紹介していただきたい。

子祥仁兄惠鑒

頃有中国篆刻名家傳抱石君（尤善刻細字、且工画）欲与 尊臺一談、

特為介紹。

又傳君欲晤河井荃廬氏、能為介紹尤禱。

專此、順頌

大安

郭沫若頓首 十一月十八日

封筒に「傳抱石君面呈」と書かれてあるので、傳抱石がこれを持って文求堂を訪問したと思われる。『郭沫若致文求堂書簡』は一九三四年に入れる）

一九三四年三月二十六日

傳抱石、金原省吾と初めて対面。（金原日記）

一九三四年三月三十日

『傳抱石君くる。これは研究科志望である。』金原氏に『傳抱石所造印稿』を謹呈した。（金原日記）

一九三四年六月

致文求堂92号書簡(六月五日)。

傅抱石が自著『摸印学』を持って文求堂を尋ねるので、出版について配慮してもらいたいむねの書簡。

逕啓者、傅抱石君有『摸印学』一部、欲在此間出版、不識貴堂能承印否。

特為介紹。如貴堂樂意承印、據傅君云、条件可不拘、請酌裁。專此、即頌

刻安。郭沫若 六月五日

田中子祥先生

附白 「函録」原稿本已妥収、丹翁信亦接読。

外、原稿数紙并附上、乞查收是幸。沫又及

この封筒に、「煩抱石兄持交 田中慶太郎様 沫若手奏」と書かれてあるので、郵送したのではなく、傅抱石がこれを持って文求堂を訪問したと思われる。

(成家徹郎『説文解字の研究』(後編)で、巻頭図版にこれを掲載した。そして『郭沫若致文求堂書簡』に従って一九三三年のものとした。ここで訂正してお詫びする。)

一九三四年六月九日

傅抱石、金原氏を訪問。《『摸印学』を日本で印刷したいが、どの位で出来るかといふから、大文堂にきくといふことにした。これは四六で百頁位か。》(「金原日記」)

一九三四年六月十九日

傅抱石、金原氏を訪問。松坂やで個展をやりたい、という希

望。(「金原日記」)

一九三四年七月六日

長崎で乗船して、上海へ向かう。(「金原日記」)
(傅抱石、九月にまた日本に来た。)

一九三四年孟冬月

傅抱石が東京から郭氏に郵送した、『傅抱石所造印稿』(全二冊。アア図書館所蔵)。

このトビラの前の一葉に次のように書かれてある。

「郵呈

沫若先生 方家教政

甲戌孟冬月後学傅抱石記于東京」

甲戌は一九三四年である。表紙には「癸酉一九三三夏至。呉梅。」とある。呉梅(一八八四〜一九三九)字は瞿安、また霜厓。長洲人。林申清編『中国蔵書家印鑑』上海書店一九九七年題字

「癸酉中夏 黄侃署」

癸酉は西暦一九三三年。黄侃、字は季剛。一九三三年には、南京にあった中央研究院歴史語言研究所に勤務していた。胡厚宣「黄季剛先生与甲骨文字」『伝統文化与現代化』一九九四年二期 中華書局

一九三四年十一月

致文求堂198号書簡(十一月五日)

劉體智氏が贈ってくれた本、転送されて受け取りました。感謝。追伸として、傅抱石君が経済的に困っているので、文化事業部補助学費を得る方法はないでしょうか、と聞いている。

大札奉悉、劉體智氏所贈書篆轉致、亦收到。諸費清神、謝甚謝甚。

專復、即頌

刻安 郭沫若 十一月五日

傅抱石君恐不能來、彼欲得文化事業部補助学費、不識有法可設否。

〔『郭沫若致文求堂書簡』は一九三五年に入れる〕

一九三五年三月二十五日

《抱石君、(展覽会の) 会場きまつて喜んでゐる。》(五月十日・十四日。松坂や) (『金原日記』)

一九三五年四月九日

傅抱石、展覽会開催が決まったので、祝賀夕食会を主催した。金原氏を招待。

《もう人達はそろつていた。郭沫若氏もみえた。これは中中しつかりした学者らしい。それでいてくれた人である。その上、下にねばりのある感でよい。》(『金原日記』)

一九三五年四月十五日

《傅君の展覽会の推薦状をかき、正木直彦氏のも代筆した。夜とりに来た。》(『金原日記』)

正木直彦(一八六二・一九四〇) 一九〇一年〜一九三二年、

東京美術学校の校長を務めた。その後、退職。

一九三五年四月

致文求堂184号書簡(四月十七日)。

傅抱石から手紙がきた。田中氏の篆刻評語をいただきたい。また河井仙郎からも感想など数語をいただきたい。そして傅抱石から郭氏にきた手紙も一緒に同封した。

ついでに「大系」増訂版の話。梅原末治氏が「越王矛」を送ってくれました。撮影が終わったら梅原氏に直接送り返していただきたく、お願いいたします。

頃得傅抱石氏來信。言前日所拜托關於篆刻評語、懇於二十二、三日賜下。又盼能

轉托河井仙郎氏賜題數語。來函照轉、乞一過目。

再者、梅原氏已將「越王矛」寄來、別封寄上、請攝影(縮小亦可)、將挿入

増訂版「大系」中也。攝影後、直接寄還梅原氏為禱。草草。

沫若 十七日

傅抱石 致郭沫若先生書簡

九日晚間お世話になりました。田中氏と河井氏の評語をはやくいただきたいので、催促してほしい。二十二日か二十三日にいただければありがたい。

友人・吳履遜、徐旅人(高師学生)がうちに尋ねてきたが、あいにく私は学校に行っていたので会えなかった。今日午後にはそちらを訪問するのでよろしくおねがいします。

沫若先生有道尊鑒。

敬啓者、九日晚間備蒙訓導、曷勝感激。日昨金原氏已送来文字一篇、正木氏亦已由岡登氏将原稿請予過目署名。前承先生代請田中先生及田中先生転請河井氏写

關於篆刻評語（或題一二句亦可）、擬乞撥冗代促一声、能在二十二、三日賜下則大佳也。又尊題拙作已付攝景、一俟送来、即転呈元覽。吳履遜先生前晚同一

江西人徐旅人（高師学生）駕敝居、適往学校、未遇。今日午後擬去問候并假書（积文は「畫」になつている）

二幅。専此、敬叩道安晚

傳抱石頓首

四月十六日晨

一九三五年五月

銀座松坂屋で個展開催（五月十日・十四日）。〔金原日記〕

一九三五年五月十日

金原氏、銀座松坂屋に行つて傳抱石の個展を見る。

《今日一日で三百円位うれた由。抱石君よろこんでいる。》

〔金原日記〕

一九三五年五月

致文求堂188号書簡（五月三十一日）。「大系」図録の件。

傳抱石の個展はあなた（田中慶太郎）のおかげで大成功でした。

「御封書拝誦（読）。拙稿一葉確かに受取。／倉章鐘は一六六葉に跨つたのでその一／葉をも寄すように御願ひします。／傳君の個展に色々御尽力下され、／傳君としては金

錢以上の收穫を／得たと僕は思つてをります。今後も／御引立てであげて下さい。三一／△」

一九三五年六月二十日

《抱石君、母上病あつしとの知らせをうけて、二十四日に国にかへるとのこと。或は間に合はぬかといつてゐる。君のために、一路の平安を祈る。紙や画などを持って来て、あづけて行つた。九月下旬またくる由》〔金原日記〕

【参考文献】

○馬良春、伊藤虎丸編『郭沫若致文求堂書簡』文物出版社一九九七

○『日中友好的先駆者・文求堂主人・田中慶太郎』編輯兼発行者 田中壯吉 発行所 極東物産株式会社 東京 非売品初版 第一次印刷一九八七、第二次印刷一九九一

○瀧本弘之『傳抱石と新興版畫の周辺』《木刻的技法》の出版をめぐつて、『民国期美術へのまなざし・辛亥革命百年の眺望』（アジア遊学一四六）勉誠出版二〇一一年十月

○『傳抱石全集』（全六卷）広西美術出版社二〇〇八（第一卷に「略年譜」あり）「附冊」（年譜収録）

○陳伝席『傳抱石』（中国名画家全集）河北教育出版社 石家荘二〇〇〇

○『二〇世紀中国画壇の巨匠——傳抱石』（日中美術交流のかけ橋）（葉宗錦作成の年譜を収録）編集・松濤美術館、発行・読売新聞社一九九九

○特別陳列—武蔵野美術大学美術資料図書館所蔵—『傳抱石の絵画』東京都渋谷区立松濤美術館一九九五

○葉宗錦『傳抱石年譜』（増訂本）上海書画出版社二〇一二

○成家徹郎『説文解字の研究』後編 大東文化大学人文科学研究
所二〇一一

○「金原省吾の日記」(略称「金原日記」)、傅益瑤「父傅抱石と恩
師金原省吾先生とのきづな」『傅抱石展図録』武蔵野美術大学美
術資料図書館 小平市一九九四

○『武蔵野美術大学・大学史史料集』第一集(学校日誌一九三一
年一〇月〜一九三四年八月) 著者 金原省吾 大学史史料委員
会編集 武蔵野美術大学発行 小平市一九九九年三月

○『武蔵野美術大学・大学史史料集』第五集「金原省吾日記」(一
九三四年) 同前編集、発行 二〇〇七年五月

○『武蔵野美術大学・大学史史料集』第六集「金原省吾日記」(一
九三五年) 同前編集、発行二〇〇九年七月

執筆者紹介

藤田梨那 国士館大学文学部教授・国際郭沫若

学会会長

坂井洋史 一橋大学大学院言語社会研究科長

杉本達夫 早稲田大学名誉教授

成家徹郎 大東文化大学人文科学研究所

斎藤孝治 著述家・中日文化研究所所長

香月 隆 放送作家・荻野綾子顕彰会会長

長谷部剛 関西大学文学部教授

陳 俐 中国・楽山師範学院中文系教授

岩佐昌暲 九州大学名誉教授

『女神』 “演奏会上”における

“一个男性的女青年”の考察

香月 隆

はじめに

岩佐昌暲氏から紙面を与えられて、郭沫若著『女神』 “演奏会上”でうたわれている “一个男性的女青年” について書くことになった。

一个男性的女青年(たくましい若い女性)——「女神全訳」藤田梨那氏訳)とは荻野綾子(おぎのあやこ)のことである。

大正八年(一九一九)十一月十五日夜、福岡市記念館で行われた九州帝国大学フィルハーモニー会十周年記念第十五回秋季演奏大会で、東京音楽学校を卒業したばかりの歌手荻野綾子がソプラノを披露した。

音楽会が終わると新聞はこう書いた。

——荻野あや子嬢の独唱は流石に本邦新進女流独唱家中の第一席を占めて居る人だけに深き印象を与えたことが多大である。

——独唱は愛に富み、ブラームスの子守唄を実に立派なテクニクで歌ひ次で「永遠の愛」なる名曲を歌ひ聴衆に最も大なる印象を与へた。あや子女史の前途実に多望である。

——福岡日日新聞 大正八年十一月十八日

そのおり九州帝国大学医学部学生であった郭沫若が彼女の演

奏を聴き、「全身の神経を戦慄させ（「女神全訳」藤田梨那氏訳）」たと詩に書いたのである。

では荻野綾子とはどんな人物だったのか。

綾子略伝

荻野綾子は明治三十一年（一八九八）、福岡藩五百四十石の武將末裔、荻野政太郎・ひさの三女として福岡市で生まれた。本名は「あや」だが高女時代ごろから「綾子」と自署している（綾子の女学生二年の日記）。

福岡市立大名小学校卒業後、福岡県立高等女学校（現福岡県立福岡中央高等学校）へ進学した。高女時代に西南学院生みの親ドージャー夫妻や高女の音楽教師中野きよ（清子、喜代子などとも記されている）に音楽を学び、楽才に目覚めた。

親族に音楽愛好者は見当たらない。いわば突然変異的に才能を開花させた。

幼いころから声がよく歌が好きで、ひとり裏山にのぼって声を鍛えていた。親族のあいだで「綾子の寒声（かんごえ）」として知られていた（綾子の従姉妹半荻野麗子氏談）。

綾子の音楽志望は家族に好意的に受けとめられた。希望通り、東京音楽学校（現東京藝大）音楽科に入学したが、福岡から上野への上昇は評判を呼び、地元では「あや子おっかけ」まで誕生している。しかし卒業時にはこんな日記を残している。

——あまり長くもなかったが馬鹿馬鹿しかった音楽生活。でも純真で可愛らしかった音楽生活。田舎ペーでお転婆で

向かふ見ずの音楽生活。胸に火を焚いて神殿を守る信徒に似た音楽生活。それだけ。それっただけでお終ひだ。

（略）

——アルプスの山々程詰まれた世界の歌曲を、片端からつて歌ひつくしてみたい。いつか心にまかせて、ほがらかに歌の花が撒き散らせる様になつてみたい。十年……十五年……私の勉強は続けられねばならぬ、さうだ。勉強をしよう。うんと苦しんでみよう、この美しい音の道をまつしぐらに歩いて何か光に逢つてみたいものだ、あゝ何もかもこれからだ。（大正八年三月二十六日）

上野奏楽堂における卒業公演で、首席に与えられる独唱の役は綾子にまわつてこなかった。ソプラノのソロは岩田さと（＝松平里子）が務めている。綾子は奈良春枝、石川潔とともに「魔笛の三人の侍女」の女声三重唱に甘んじた。

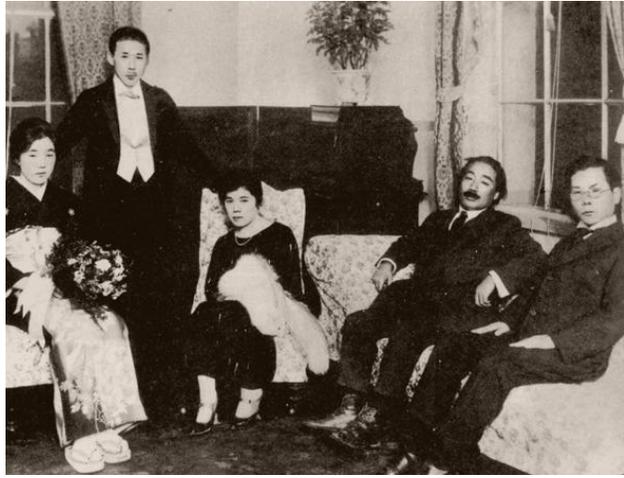
ところが二年後研究科を終了すると、ただちに山田耕筈の抜擢を受け、音楽家として注目を浴びることになった。そのころ撮影された写真に、当時一流の文化人だった山田耕筈、北原白秋、三木露風らと一緒に記念写真がある。（下）

このあざやかな綾子飛翔の背景に何があつたのか。

それはあとで節をもうけて述べることにして、さらに綾子略伝を続けよう。

綾子の人生の特筆事項に詩人深尾須磨子との共同生活がある。大正十年（一九二一）、夫と死別した須磨子は東京小石川丸山町に家を借り、そこへ交流を始めたばかりの綾子呼び寄

【写真Ⅱ左より荻野綾子、山田耕筰、深尾須磨子、北原白秋、三木露風一九二二頃？Ⅱ台東区ホームページより】



せ、同居をはじめた。

そこで綾子と須磨子の贅沢なパリ留学の計画が練られた。

綾子が福岡藩武將の末裔なら、家柄において須磨子も負けていなかった。父は徳川家最後の家臣で母は篠山藩の武家の家柄である（「深尾須磨子・女の近代をうたう」逆井尚子）。さらに須磨子が結婚した深尾贇之丞（ふ

かおひろのすけ）の先祖は、織田信長の家臣で岐阜の太郎丸に城を築き、後に武士をやめて野にくだったが、土着したあととも大きな財産を代々継いでいた。贇之丞が早世したあと、寡婦の須磨子は謀略ともいえる財産獲得の術を合法的にあやつり、深尾家から巨大な富を得ていた（「深尾須磨子・女の近代をうたう」）。

いっぽう綾子の実家では綾子と須磨子の留学のために、福岡市郊外三宅にあった江戸時代からの広大な荻野家の領地を売

り、代金を二人に提供した（荻野綾子の弟荻野政朋氏談）。福岡の実家では綾子と須磨子の運命共同体にたいする支援体制を確立させていたのである。

綾子と須磨子はけちな外国暮らしをしなかった。

住まいはパリ高級住宅街の十六区。綾子は世界に名を知られるクロワザに音楽を学び、須磨子は詩の勉強のかたわら趣味のフルートを超一流の奏者モイーズに学んだ。

綾子は本来、東京音楽学校でドイツ音楽を学んだのだが、卒業後数年でフランス歌曲の世界へ踏み込んでいった。わたしはそれをフランス文学に傾斜した須磨子の影響だと考えている。



やがて綾子はシャンゼリゼ劇場に日本人初の歌手として登場。わが国の東北地方の古謡「もみすり唄」「草刈唄」を日本語で歌い、パリジャンの絶賛を浴びた。

【写真Ⅲパリ時代・荻野元也氏所蔵】
母校の東京音楽学校へ講師として着任した。そしてわが国にはじめてフランス歌曲や楽器のハープをもたらしした。

が、同校でドイツ語を教えていた太田太郎教授と親密になり、その子を宿した。最愛の友だった須磨子は激怒して公開絶縁状を綾子に突きつけ、綾子、須磨子、太郎のあいだに壮絶な愛憎のドラマが展開して世間をわかせるが、それは今回の本題では

ないので略させていただきます。

荻野綾子を調査したわたしが結論としていえることは、彼女の真摯な人柄である。

虚飾のない性格で自分の名声におぼれることがなかった。日本音楽界の墮落を憂い、つねに新風を送ろうとつとめた。後進の指導にも熱意を注ぎ、ときには金銭的な援助も惜しまなかった。

綾子の支援を受けた著名な音楽家は多い。橋本國彦、清瀬保二、箕作秋吉、宮原禎二、そのほか。ブルースの女王淡谷のり子も「荻野綾子先生がいなかったなら、歌手淡谷のり子は存在しなかった」と語っている。今も音楽界に残した荻野綾子の偉業をしのぶ音楽家は多い。

だが太平洋戦争末期、これから音楽家としての充実期を迎えようという四十四歳の秋、病を得てなかば栄養失調の状態となり、千葉の疎開先で少ない身内に看取られながら死んでいく。そして終戦。戦後の混乱は一介の音楽家の記憶など忘却の海に埋没させてしまった。綾子は国際的なソプラノとして、日本における西洋音楽受容史の黎明期に大きな功績を残したが、いまやその存在すら忘れ去られている。それが福岡生まれの荻野綾子だ。

綾子飛翔の背景

大正八年（一九一九）、郭沫若が聴いた一个男性的女青年のソプラノ演奏——九州帝国大学フィルハーモニー会十周年記念第十五回秋季演奏大会は荻野綾子にとって音楽学校卒業直後の

巣立ちの演奏会であった。

演奏会のプログラムを見ると、指揮とヴァイオリンはフィルハーモニー会生みの親である九州帝大医学部教授榊保三郎博士。ピアノ伴奏は福岡高女の音楽教師中野喜代子。ふたりは九州帝大フィルハーモニー会初期からのコンビであった。

綾子は高女時代、音楽の中野先生に強い憧れを抱いていた（荻野綾子女学生日記二年）。おそらく中野先生の背後に存在する九帝大フィルにも大きな関心があっただろう。

中野喜代子にとって、教え子の綾子は東京音楽学校へ進んだ秀才だ。フィルハーモニー会会頭の榊博士にその存在を告げ、それが博士の綾子抜擢に直結したはずである。

加えて次のような事情がある。

九州帝大フィルハーモニー会は「日本最古のオーケストラ（福岡県百科辞典・鳥山隆三）」で、その会頭である榊保三郎は全国区の著名人であった。たとえは与謝野晶子が雑誌「明星」への寄稿を榊博士に依頼したりしている。榊博士につながる綾子の経歴は、これから社会へ飛翔しようとする彼女に有利に働いたに違いない。

大正十年、与謝野晶子らが創設した文化学院に、音楽学校研究科を終了したばかりの綾子が音楽教師として加わることになった。山田耕筰のダンス授業でピアノ伴奏を担当することになったのである。耕筰との出会いであった。

大正十四年、耕筰は名曲「からたちの花」を作曲した。その譜面には「わたしの愛する荻野綾子へ捧げる」というドイツ語の献辞が添えられた。が、耕筰と綾子が恋愛関係にあったとい

うわけではない。耕笹は綾子をまじめに評価していた。ジョークの多いあの耕笹が、こと綾子のことになると威儀を正してほめるのだ。綾子のパリ留学にあたって、耕笹独特の真摯なロマンスリズムをこめて新曲に綾子の名を添え、餞別としたというのが真相らしい。

他方、与謝野晶子との交流は婦人社会運動へもつながった。

明星発刊の翌年、与謝野晶子、山川菊栄、宮本百合子、河崎なつ、深尾須磨子ら婦人運動家が集まって「ロシア飢饉救済婦人有志会」を結成。露国大飢饉救済慈善音楽会が開かれ、荻野綾子が歌っているがその出演料を寄付している。さらに七年後、綾子は市川房枝が推進した婦選運動にも参加し、婦人解放運動家として知られるようになった。

これら綾子飛翔の出発点は大正八年のあの九帝大フィルハーモニー会十周年記念大会であり、その一個男性的女青年のソプラノを郭沫若が聴いたのであった。

一個男性的女青年

郭沫若は音楽会における荻野綾子の姿をこう表現したが、
「たくましい若い女性」とはどういう意味なのだろう。綾子が残した二冊のパスポートを見ると身長は百五十六センチ、または百五十八センチとなっている。明治生まれの日本女性としては大柄であった。生存する綾子の最後の直弟子上村京子氏（上野学園大学名誉教授）も、「荻野先生は大きい方で、舞台でも堂々としていました」と語っている。

綾子の親族のあいだでは、「綾子は男に女の髪をのせたこと



はどう映ったのだろうか。

当時、日本の洋楽受容史は黎明期にあり、ドイツ古典音楽や浪漫派音楽が主流であった。演奏会でグルックの歌劇「アルチエステ」やブラームスの「子守歌」「永遠の愛」を綾子がどのように歌唱したのかわからないが、綾子のソプラノは原田収（テノール）が「白銀のソプラノ」と喩えたように、透明で高貴な光りを放つ格調高い美声である。あるいはそれが郭沫若の「全身の神経を戦慄させ」たのかもしれない。

日露戦争後わが国は世界の列強と伍するようになって、文化成長時代を迎えていた。日本へ西洋文化のミラーイメージを求めてきた中国の学徒たち、特に郭沫若のような感性豊かな詩人たちは、荻野綾子のドイツ・リートに西欧の浪漫派音楽の格調と熱風を見たに違いない。岩佐昌暉氏は、郭沫若の演奏会鑑賞が義弟陶晶孫の誘いによるものだったかもしれないと書いておられるが、わたしのようにフィクションを扱うものにとっては、氏の推測はまことに楽しい空想となって膨らんでいく。たとえ

る（のせたみたい）と、彼女が男っぽい姿だったと伝えている。一九一九年の写真【（上） 近代日本音楽館所蔵】をごらんいただきたい。郭沫若の目に

ばシャイな知性派の陶晶孫が、郭沫若のままでピアノを弾きながら王妃アルチエステの悲哀を語りきかせていく。郭沫若はおもわず日本人のわが妻、安娜（アンナ）に心を馳せる、といったような。

九大フィル十周年記念演奏会から六年後、荻野綾子の音楽研究はドイツ・リートからフランスの印象主義音楽へと転じていった。後年、ドビュッシーやラヴェルを愛するようになった円熟の音楽家荻野綾子を見たら、郭沫若はなんと表現しただろうか。

「演奏会上」の背景

岩佐昌暉

はじめに — 香月論文掲載の由来 —

『女神』に「演奏会上」という詩がある。郭沫若が（多分）はじめて西洋音楽に触れた感動を述べた作品である。『女神』所収の詩にはその執筆日時を記すものが多い。だが、この詩にはそれがない。それだけではなく、詩の背景（いつ、どこで開催された、どのような演奏会なのか、いや、そもそもこの演奏会は現実のものなのか、虚構なのか等）も一切書かれていない。

だが、調べた結果それは九州帝国大学フィルハーモニー会（以下「九大フィル」と略記）が1919年11月に開いた演奏会だったことが分かった。詩中の「ボーイッシュな若い女性」が荻野綾子という名前だということも分かった。ただ、荻野についての詳細までは分からず、また、それ以上の追究もしなかった。

昨年『西日本新聞』の記事で福岡在住の脚本家・香月隆氏が荻野綾子の伝記『評伝・まぼろしの歌姫 荻野綾子』（2014年2月、荻野綾子顕彰会刊）を出版されたことを知り、さっそく同氏に連絡して同書を手した。荻野の親族への聞き取りなど、具体的な調査と、彼女の生きた時代・社会への広い目配りに基づく評伝で、荻野の人生への深い共感と敬愛がにじむ一書だった。本号への寄稿を懇望したところ、快諾を得て、「演奏会上」に焦点をあてたご論考をお送りいただいた。この作品の読みを深める好資料である。

「演奏会上」成立の背景 —

以下は香月論文の理解のために、「演奏会上」の原詩、拙訳およびこの詩について書いた旧文の要旨である

演奏会にて

Violin と Piano の結婚、

Mendelssohn の「真夏の夜の夢」はもう終わった。

ボーイッシュな若い女性が

Brahms の「永遠の愛」を独唱している、

彼女の Soprano の高音は、

多くの全身の神経を戦慄させる。

千を超す聴衆の魂が一つになっている。

ああ、勇壮なハーモニー、神秘的な沈黙、ひろびろとした愛の海よ！

怒涛のような拍手がこの魂の合歓を破った。

ああ、魂の解体されていく悲哀よ！

【原詩】Violin 同 Piano 的結婚、Mendelssohn 的《仲夏夜的夢》都已过了。／一个男性的女青年／独唱着 Brahms 的《永远的愛》、她那 Soprano 的高音、／唱得我全身の神経战栗。／一千多听众の灵魂都已合体了、／啊、沈雄的和雍、神秘的渊默、浩荡的爱海哟！／狂涛似的掌声把这魂灵的合欢惊破了、／啊、灵魂解体的悲哀哟！

詩は1920年1月8日上海の『時事新報』副刊「学灯」に発表された。当時福岡で西洋音楽の演奏活動をしていたのは九大フイルしかない。九大フイルは『九大フイルハーモニー・オーケストラ50年史』（1963年6月、同会刊）を刊行しており、同書には創設以来の演奏会の記録が収録されている。1920年以前の演奏会のプログラムで、この詩の内容と共通するものを調べると、前年11月開催の「10周年記念第15回秋季演奏大会」を見出す。そのプログラムは以下のようで、郭沫若の詩の内容と合致する。

1. ヴァイオリン独奏 榑保三郎氏 伴奏 中野喜代子女史
ヴァイオリン司伴奏（作品26番）
2. ソプラノ独唱 荻野あや子女史 歌劇「アルツエステ」中
抒情調 グルック作
3. 管弦楽 会員一同 第一交響楽（作品21番）ベートホフエ
ン作
4. ピアノ独奏 中野喜代子女史 イ 聞けよ 聴け雲雀の歌
を（朝のセレナード）シューベルト・リスト作 ロ 華麗
舞曲 変イ長音階 ショパン作／

5. ソプラノ独唱 荻野あや子女史 （1）子守歌 ブラーム
ス作 （2）永遠の愛 ブラームス作／

6. 管弦楽 会員一同 真夏の夜の夢 メンデルスゾーン作
インテルメッツォ ノクチエルネ 結婚行進曲

このプログラムから、詩にある「Violin 同 Piano 的結婚」とはプログラム1番「ヴァイオリン独奏」榑博士のバイオリンと中野喜代子女史によるピアノ伴奏であり、メンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」は最後の演目である会員一同による管弦楽だということと分かる。そして、彼が全身の神経を戦慄させた Soprano の高音はプログラム5番ブラームスの「永遠の愛」を歌った荻野あや子女史の声であった。（香月隆氏によればピアノ独奏の中野喜代子は荻野の福岡高女（現福岡中央高校）時代の音楽教師だった。）

なお、原詩には郭沫若による人名、曲名等の解説が付されている。これは郭沫若自身が調べたものか、それとも当日配布されたプログラムに「曲目解説」があり、それを中国語訳したものか、残念ながらプログラムの現物がないたため不明である。

前記資料に、九大の公式資料『九州大学七十五年史（資料編上巻）』、1989年5月、九州大学刊）を付き合わせてみると、九大フイルは1912年（明治45年）医学部精神病学講座教授・榑保三郎博士（1906年から25年まで在任）によって設立されたことが分かる。榑はドイツ留学中にバイオリンを学び、九大着任後の07年に学内外の有志とベートーベン誕生日祝賀音楽会を開いた。九大フイルはこれが発展したものである。1910年、第1回演奏会が持たれ、その後毎年春夏に演奏会を催した。会はだんだん発展し会員数も増え、同時に演奏曲目も増えた。だが、その

結果管弦楽組成上、高価な楽器の購入が必要となり、また会の維持経費も膨大となった。従来これらの経費は榊博士が負担していたが、このままでは会の発展が困難ということで19年秋の演奏会より一般聴衆からは入場料をとることが決まった。

郭沫若が聞いた演奏会は入場料を取って一般に公開された最初の演奏会（「10周年記念第15回秋季演奏大会」）で、19年11月15日土曜日夜7時半から福岡市因幡町福岡市記念館で開催された。井上精三『博多大正世相史』87年8月、海鳥社）によれば、当夜の入場料は2円、1円、50銭の3種類。ちなみにこの年の年平均価格で上等白米が1キロ34銭、牛肉1斤が73銭、木炭1キロ56銭だった（福岡市役所編「福岡市史 大正編資料集」63年12月、福岡市役所）から、それほど安い金額ではなかった。郭沫若がどの切符で入場したかは明らかではないが、妻子持ちの貧書生に過ぎなかった郭沫若にとって贅沢な支出だった。

だが、この演奏会は郭沫若にとっては「近代」を身を以て知る体験の一つであった。彼が全身の神経を集中させて西洋音楽に没入したことが「靈魂的合体」や、曲の終わったときの「靈魂解体的悲哀」などの表現からうかがえる。この近代体験の刺激が「演奏会上」執筆の最大のモチーフであった。

ところで、郭沫若はなぜこの夜、演奏会を聞きに行ったのだろうか。推測にすぎないが後に彼の義弟（妻佐藤富子の妹・操と結婚）になる陶晶孫（1897—1975）の誘いによるものではなかったろうか。陶はこの年に医学部に入学し、このフィルハーモニーの会員になった。陶晶孫との関係や郭沫若の学生生活、彼の近代体験を考える上で、いろいろな連想を誘う作品である。

泉州開元寺と郭沫若、弘一法師について

齊藤孝治

二〇一四年十月十八日、中国福建の泉州市で開催された国際シンポジウム「東亞文化与鄭成功」に参加したが、シンポジウム終了後の翌十九日、市内にある福建四大名刹の一つ、開元寺を主催者である泉州鄭成功研究会会長の鄭棟梁をはじめシンポジウムのメンバーらとともに訪問した。

ちなみに開元寺の開元とは、唐の玄宗皇帝が治政下に置いた開元二十六年（七三八年）、時の年号を用いて各州に一つずつ創ったことによるもので、現在、中国には同名の寺院が十四ある。

泉州開元寺への訪問は、それ自体嬉しいことだったが、個人的にもかねがね望んでいたことであった。

というのも開元寺はこの間、長らく研究対象にしてきた鄭成功や郭沫若と深い繋がりを持っていたからである。

具体的にいうと、鄭成功絡みでは、明末、彼の父、鄭芝龍が同寺に香炉を寄進したことを側聞しており、また郭沫若絡みの場合は、一九六二年十一月十三日、彼が出来上がったばかりの



映画「鄭成功」の台本チェックのために訪ねていたからである。

開元寺の説明などによると、まず鄭芝龍寄進の香炉は鉄を鑄造して造ったもので、大人の身の丈以上もあり、鑄銘には、鄭芝龍の名前が刻み込まれていたことがわかった。

しかし、その香炉は、文化大革命以前は、寺院の中心を成す大雄宝殿内に置かれていたものの、文化大革命以降は、破損などを憂慮して大雄宝殿外に移しているとのことであった。

また郭沫若絡みでは、境内の一角に彼が来訪を記念して創った七律を刻んだ石碑が建立されていたのである。

七律の詩文は次の通り。

刺桐花謝刺桐城、法界桑蓮接大瀛
石塔双擎天浩浩、香炉独剩鉄铮铮
匪非自古多兄弟、唐宋以来有会盟
収復澎台今又届、乘風破浪待群英

〈大意〉

泉州に多く見られる刺桐(ザットン)の花は、己を象徴にしてくれた泉州に謝している、そして開元寺大雄宝殿の西側に植わっている桑の老木は、その昔、故あって白い蓮の花を咲かせたという伝説を有しているが、その幽玄な法華の世界は、大海原に接している、といっている

境内の東西に聳え立つ二つの石塔は、広大な天をも穿ちそうであり、また独りふんだんに鉄を用いて造った香炉は、光沢を放ち、目を奪う

顧みてアジア・アフリカには古(いにしえ)より兄弟連が多く、唐、宋の時代以来、盟約を結んできた
今、台湾、澎湖列島を解放、収復しようという令が下っている、強風、波濤をもともしない群英の出現を待とうではないか。



ていた。

その後、境内を散策していると、ふと「弘一法師纪念馆」と記された案内板が目についた。

それには、次のように説明されていたのである。

「弘一法師(一八八〇—一九四二)、俗名李叔同、一代高僧、我国新文化運動和中日文化交流先驅、佛門弟子奉為律宗十一代世祖。後十四年雲游福建、曾駐錫開元寺、円寂于泉州温陵養老院。趙朴初贊為：、無尽奇珍供世眼、一輪円月耀天心」

この七律からもわかるように、郭沫若は、この訪問の時、鄭芝龍寄進の香炉を見ていたのである。その時の模様を写した写真もあるが、それによると香炉は取っ手が付き、三本の鼎で支えられた頑丈で立派なものに見える。もちろん写真には郭沫若も同行者と一緒に写っ

しかし残念ながら記念館は、開館時間が過ぎていたため、館内を観覧することは不可能だった。

だが案内板に指摘されている弘一法師、李叔同(以後、弘一法師と称す)が中国に於ける新文化運動や日中文化交流の先駆的な存在であり、さらに仏門に入り、戒律の厳しい(南山)律宗の第十一代祖師を務めた、という人となりは、驚かせるに十分であった。

恥ずかしながら初めて知ることだったからだ。

日中間の相互理解の上から何としても弘一法師のことを調査、研究しなければ、と思ったのである。

ちなみに後でわかったことだが、開元寺の案内板にある「**我新文化運動和日文化交流先駆**」とは、具体的にいうと、若き日、日本に留学し、東京美術学校(現東京藝大)で西洋絵画を専攻しながら西洋演劇、音楽にも強い関心を持った弘一法師が、中国人留学生の欧陽予倩(早大)、田漢(東京高師現筑波大)らとともに演劇団体の「春柳社」を立ち揚げ、デュマの「椿姫」(中国名、茶花女)やストウ夫人の「アングル・トムの小屋」(中国名、黒奴籲天録)などを上演、それが契機となって京劇に象徴される中国の伝統演劇に「風穴」を開け、社会全体の改良に影響を与えたこと、同時に日中文化交流の先駆的な役割を果たしたことを指している。

また弘一法師は、故郷の天津に妻がいながら東京で絵のモデルになった日本人女性と結ばれたものの、彼女との葛藤、確執がやがて仏門に入る一因ともなっていた。

しかし彼女については、姓名、出自はもとより弘一法師と別

離後、どういふ人生を送ったかは全くわかっていない。

弘一法師の日本に対する想いは複雑で、日本の中国侵略に反対しながらも一九二九年、福州の名刹、鼓山湧泉寺で発見した仏典「華嚴疏論纂要」を自ら二十五部復刻し、そのうちの十五部を上海の内山書店(内山完造経営)を介し、日本の寺院、大学に寄贈していた。

賛を贈った趙朴初(一九〇七―二〇〇〇)は、弘一法師記念館設立当時、中国仏教協会会長であり、弘一法師の生涯を「俗世を心眼を以て視、無限の警句とエピソードを供し、その生き様はまるで天の中心に丸く輝く月のようにであった」と高く評価したのである。

開元寺との繋がりは、一九四一年冬、行脚を続ける弘一法師が一時的に身を置いたことによる。

【参考】郭沫若作の七言律詩「詠泉州」について

文中の律詩は原題「詠泉州」。郭沫若は62年11月の一カ月を福建で過ごした。福建滞在中、各地に遊び多数の詩詞を作った。泉州ではこの「詠泉州」と「詠五里橋」(五里橋は鄭成功の父・鄭芝龍の旧邸)をつくる。福建滞在中に詠んだ詩詞は「詠福建二十二首」に収められたが、泉州で作った二首の律詩はなぜか収められず、63年作家出版社から刊行された詩集『東風集』(全集・文学編第4巻)で始めて公開された。全集所収の原作は最後の句が「焚燒紙虎待群英」(紙虎「張り子の虎」アメリカ帝国主義の比喩)を焚燒せんには群英を待たん)となっている。(Y)

【資料紹介】

彫刻家・東洋音楽研究者・林謙三の放送原稿発表について

以下に紹介するのは、彫刻家で東洋音楽研究者・林謙三が、昭和三十一年四月十七日NHK国際放送で語った、彼と郭沫若との交流の思い出である。郭沫若と林謙三については、藤田梨那氏が、二〇〇八年九月九州大学で開催した本会主催の郭沫若研究国際学術集会の報告（「郭沫若の万常宝研究に関する動機の考察」Ⅱ会報第11号に要旨掲載。後、岩佐・藤田・武編『郭沫若の世界』花書院、二〇一〇年に中文を収録）で触れているが、研究の重点が文学面に偏っている日本の郭沫若研究では、等閑に付されてきたように思う。

編集部では、偶然のことから、現在林謙三の中国語著作『隋唐燕楽調研究』（郭沫若翻訳）の研究に取り組んでおられる関西大学・長谷部剛文学部教授を知り、同教授から林謙三の録音用生原稿の提供を受けた。貴重な資料であり、是非会報に掲載させていただきたいとお願ひし、長谷部教授を通じ林のご子息・長屋礼氏の許諾を得た。今後の郭沫若研究に役立つと確信する。資料の公表を許諾された長屋氏および提供いただいた長谷部教授に心よりお礼を申し上げます。なお、林の話は二日後の十九日に同じくNHK国際放送によって中国語放送された。郭沫若ら関係者がその事実を知ったかどうか、不明である。

また、長屋氏には貴重な写真の公表のお許しを得、長谷部教授には、林謙三の研究業績、彼と郭沫若の関係等について詳しい解説を執筆いただいた。併せて掲載する。（編集部）

▼NHK国際放送原稿 ▲

郭沫若さんと私の『隋唐燕楽調研究』

林 謙 三

郭沫若さんと云えば今は中国第一級の文化人として誰知らないものもない有名な方であり、その人の幅の広い学問やすぐれた文学上の多くの仕事は世界的に高く評価されています。

私は不思議な縁から、この人が日本に亡命して来られた十年ほどの間、日本人の誰よりも身近に交わりを結ぶことができ、その上大変な恩恵を受けました。そのことは私の一生涯を通じて忘れることができないでしょうし、大きな誇りの一つとしているのであります。

私が始めて郭さんに出逢ったのは一九二八年、亡命直後、中国古代の文字として有名な甲骨文字の研究資料を求めて東京駒込の東洋文庫に通っておられた時であります。私は当時中国古代音楽資料をさがして同じ文庫に通っておりました。私は郭さんがそんなに有名な方とは全く知らないで、あっさりした付き合いを続けていました。勿論市川のお宅にも度々訪問しましたし、私の家へも招いたりしました。そしてその人の広い深い学問上の智識に接して私の研究がどれほど豊かにされたか計り知ることができません。

交際が七年も続いた間に郭さんの仕事は驚くほど多量な立派な著書となって次々に世に現れました。それに比べて私の研究は相当進んではおりましたが、あまり特殊過ぎて日本で発表す

る機会がなかなか掴めそうにありませんでした。ある日、私がこの苦しみを郭さんに話したら、郭さんは自分から進んで「ぢや私が中国文に訳して中国で発表できるように努めてあげましょう」と申し出され私を狂喜させました。これが私の「隋唐燕楽調研究」と題する論文が世に出る始まりです。

燕楽調と云うのは俗楽に用うる楽調の意味で、主としてインド起源の音楽調が中国六朝の末頃から伝来し隋を経て唐時代に完成したものであります。その後中国の俗楽や日本の雅楽にもこの楽調のいくつかを今日まで伝えていますが、本書はこの楽調の起源や名称や性格を実証的にくわしく研究したものであります。

ところが郭さんは音楽に縁の遠い方だし、殊に中国の古代音楽については門外漢でありましたので、この訳の精確を期すために、私の論文に関係のあるいろいろの文献を集めて研究を積みまれました。だからこの小さな研究の訳にも思いがけない月日がかかっております。一通り訳ができ上ってから、疑問が湧けばそれを問いただし、矛盾があれば指摘して已まなかつたので、訂正には更に数か月を要しました。私はその頃、奥さんから「うちの主人は一つことに凝りだすと他のことを顧みない性質です」と聞かされ、この訳のために自分の仕事も一時放棄しておられたことを知り大変すまないと思いましたし、またそんなにまでして頂けることを大変うれしく思いました。郭さんはこの時、研究の副産物として隋の天才音楽家と云われた「万宝常」の評伝があります。これは確か『日本評論』か何かに掲載された筈ですが、郭さんにこのような作品があることを知っ

ている人は今はあまりないでしょう。

さて訳は完成しましたが、郭さんの顔でも出版を引受けるところはなかなか見当りません。でも漸くのこと、中法文化出版委員会の厚意により中国最大の書店である上海の商務印書館から出版されるときまった時の私の喜びは言葉では云い尽くせません。この書は一九三六年十一月に初版が出ました。私はこの書によって日本の学界に第一歩を乗り出したわけであり、またこの書を仲介として中国その他の学者の知己を得ました。この書は今から二十年ほど前のものであり、改めたい箇所も少な

【写真Ⅱ自作の郭沫若像

を囲む林謙三と郭沫若】

らずありますが、私の第一番目の野心作であり、郭さんの助力が織り込まれていることによつて、私にとつてはまことに記念すべきなつかしい著述であります。郭さんにしてはこんな訳など一生の仕事の上では数の中に入らないかも知りませんが――。郭さんに対する感謝のしるしとして私はその肖像を作つて贈りました。それは今でも保存されていると思ひます。

この書の出版によつていよいよ郭さんが私の身近かの人になつて来ましたのに、翌一



九三七年、七月に不幸な華北事変が起き、私はとうとう郭さんと遠く離れなければならなくなりました。その月の二五日の朝、私は何も知らずに郭さんを訪ねたところ、郭さんはその日の明け方に家を出奔されたとのことを奥さんから聞かされて大変驚きました。始めから終わりまで全く不思議な縁でありました。

それ以後やがて十八年になろうとしています。私は郭さんから受けた大きな恩を終世忘れられる筈はありません。いつもなつかしい思いを胸にたたんで、長年月にわたる中国音楽に関する私の研究が立派にまとまったら、それを郭さんにささげたいと、ひそかに思つて今日まで静かに過ごして来たわけでありません。

■原稿は以上であるが、別紙に「昭和三十一年四月十四日録音。同十七日NHK国際放送、十九日中国語放送」とある。

■文中の写真は長屋札氏（林謙三の子息）所蔵。

郭沫若と林謙三について

長谷部剛

一九二八年から三七年までの日本亡命中、郭沫若が中国古代史および甲骨金文の研究に従い、大きな業績をあげたことはよく知られているが、林謙三著『隋唐燕樂調研究』を中国語訳し上海にて刊行したこと、また「隋代大音楽家——万宝常」(一)を著したことなど、中国古代音楽の研究に関わったことはあま

り知られていないようである。

『隋唐燕樂調研究』は一九三六年一月、上海の商務印書館から出版された。日本亡命中の郭沫若が、甲骨文字の研究資料を求めて訪れた東京、東洋文庫で林謙三と交友を結び、その縁で林の研究を郭が中国語訳し上海で出版したものである。同書の林自身による日本語版は存在しない。

まず林の経歴紹介から始めたい。林謙三は明治三二(一八九九)年大阪市に生まれ、東京芸術学校(現、東京芸術大学)彫刻科に進む。彫刻家として大正一三年(一九二四)以降、ほぼ毎年連続して帝展に入選し、その前年からはホルンの演奏・作曲も始める。昭和二(一九二七)年秋、朝鮮を旅行し古蹟古美術の見学をしたことから東洋古典音楽に関心を抱き、翌年その資料を求め通い始めた東洋文庫で郭沫若と知己となる。『隋唐燕樂調研究』完成後は、敦煌琵琶譜と(正倉院宝物)天平琵琶譜の解説に着手、さらに研究対象を東洋古楽器全般へと拡大。昭和一七年、『東亜楽器考』として富山房より出版を計画するものの、実現せぬまま終戦を迎え出版計画は途絶する。昭和二二年、初めて正倉院宝庫に入り翌年には宮内庁図書頭より正倉院楽器調査の委託を受ける。その業績「東洋古代音楽の研究と正倉院古楽器の復元」をもって昭和二四年朝日賞を受賞。昭和二六年には奈良学芸大学(現、奈良教育大学)教授に就任。催馬楽の研究にも着手。昭和三〇年一二月訪日中の郭沫若と、日中戦争勃発のために電撃的に中国に帰国して以来一八年ぶりの再会を果たす。昭和四〇年、奈良教育大学を定年退官し、布施女子短期大学(現、東大阪大学短期大学部)教授となつてからも、正

倉院樂器の研究・復元を継続的に行い、さらには伎楽面まで研究範囲を拡大させた。昭和五一（一九七六）年、七七歳で没した。

敦煌琵琶譜や天平琵琶譜などの古楽譜解読の成果は著書『雅樂—古楽譜の解読』（音楽之友社、一九六九年十二月）に、長年にわたる正倉院樂器研究の成果は、『正倉院樂器の研究』（風間書院、一九六四年六月）に結集されたが、林謙三の研究は広範囲かつ膨大な量に及び、もちろんこれに尽くされるものではなく、またその研究の核心的部分について言えば、むしろ中国で広く知られるところとなっている。『隋唐燕樂調研究』を嚆矢として、一九五七年には潘懷素の訳によって『敦煌琵琶譜的解讀研究』が上海音楽出版社から刊行され、さらに一九六一（昭和三六）年、郭沫若の命を受けた歐陽予倩からの申し出により、林謙三は日本での刊行が途絶していた『東亜樂器考』の原稿を手渡し、それが同名の中国語版として一九六二年北京、音楽出版社より出版される。一九八六年七月には、『隋唐燕樂調研究』が、哈爾濱師範大学古籍整理研究室によって凌廷堪（一七五七—一八〇九）『燕樂考原』、邱瓊蓀（一八九七—一九六四）『燕樂探微』の二書とともに『燕樂三書』として校訂のうえ刊行される（黒龍江人民出版社）。一方、日本では『東亜樂器考』の日本語版が出版されたのはその一年後の一九七三年であった（カワイ楽譜）。林謙三が一九五〇年代に傾注した催馬楽の研究は『催馬楽の音楽的研究』の題でまとめられているにもかかわらず、未刊行のままである。

『隋唐燕樂調研究』は、もとは日本語で書かれたにもかかわ

らず日本語版が存在しない。中国では郭沫若訳の中国語版があるために隋唐音楽研究、および音楽に関連する文学の領域で同書は必読の著と見なされていると言っても過言ではないが、日本での認識は中国ほど高くはない。日本の中国文学研究の領域でも同書を積極的に活用しているのは、管見の限りでいえば村上哲見『宋詞研究』⁽¹⁾ などごく少数である。同書は全九章と附論からなり、第一章から第九章までは唐代の音律（「雅楽の」正律）「俗律」「清商律」のうち「俗律」が龜茲（キジル）樂の音律から生まれたことを出発点にして唐玄宗皇帝期までの音楽、特に「俗楽」⁽²⁾ 「燕樂」の実態について詳細な考察を加え、「附論」ではそしてそれが日本に伝来して「雅楽」を形成した過程での、その「雅楽」の調や音位まで復元を試みている。

北周、武帝（五四三—五七八在位）のとき龜茲から来朝した樂人、蘇祇婆がインド起源の七調の樂理を伝える。隋の學者、鄭譯は開皇二（五八二）年に雅樂の制定の際に、蘇祇婆の七調を、中国の「宮」「商」「角」「變徵」「徵」「羽」「變宮」の七音、および「黄鍾・大呂・太簇・夾鍾・姑洗・仲呂・蕤賓・林鍾・夷則・南呂・無射・応鍾」の十二律に適應させた八十四調の理論を提出する。この鄭譯が提出した八十四調の理論は、実は、万宝常の説を盗んだものと主張するのが、郭沫若「隋代大音楽家——万宝常」なのである。

理論的には八十四調あるうち、唐代には二十八調が「俗楽」⁽³⁾ 「燕樂」に用いられるようになり「燕樂二十八調」が成立する。『隋唐燕樂調研究』はこの「燕樂二十八調」が龜茲樂に基づいていること指摘し、さらに個別にその由来と後世の変化、雅

楽や清商樂などほかの調・音律との対応関係を論じ、最終的には音高の推定まで行っている。

筆者は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「南北朝樂府の多角的研究」(研究代表者：佐藤大志(広島大学)、二〇〇六〜二〇一〇年)の研究分担者として『隋書』音樂志の解説に携わった。この研究の遂行において最も重要であったのが林謙三『隋唐燕樂調研究』である。筆者を含め共同研究者たちは必要に応じて同書を日本語訳しつつ『隋書』音樂志の訳注稿を作成したが、日本語で書かれた著作であるにもかかわらず日本語版のないことを惜しみ無しとはしなかった。専門性が極めて高く、しかもこの研究領域では先駆的で独創的な研究であるために、内容・文辞の両面で難解な中国語訳でどれほど原著者の意図が尽くされているか、不明であったからである。

折しも林謙三のご子息、長屋紘氏(元、関西大学職員)のご厚意により林謙三旧蔵書・旧稿を調査する機会に恵まれ、二〇一〇年一二月以降、複数回にわたり、科研費「南北朝樂府の多角的研究」の研究代表者、佐藤大志と研究分担者、狩野雄(相模女子大学)、山寺三知(國學院大學北海道短期大学部)及び筆者が奈良の林謙三旧邸を訪問した。林謙三旧邸調査の結果、大部の未発表原稿を発見し、そのなかには「唐樂調の淵源」と題する原稿があった。表紙に『東亜樂器考』附録「富山房」とあり、「唐樂調の淵源」は、昭和一七年富山房より出版を計画するものの実現せぬまま終戦を迎え出版計画は途絶した『東亜樂器考』の附録として収められるはずであった論文であることがわかった。『東亜樂器考』は後年『東アジア樂器考』として出版さ

れたが「唐樂調の淵源」は収められていない。同論文の内容を閲するに『隋唐燕樂調研究』と重なるところが多く、このことから中国語版『隋唐燕樂調研究』の出版後、林謙三みずから同書の日本語版を執筆していたことがわかる。前述したように同書は先駆的な研究であり、発表後の補訂や修正が必要な箇所もあったはずである。「唐樂調の淵源」はそれがなされていることになり、『隋唐燕樂調研究』とペアで公開され研究者に活用されるべきものと筆者たちは判断している。ただし、分量的に『隋唐燕樂調研究』の全部に対応しているわけではなく、カバーできない部分は中国語版を日本語訳し、それと「唐樂調の淵源」の解説・翻刻作業によって『隋唐燕樂調研究』の全貌を新しくよみがえらせることが可能であると考えている。

前に載せる林謙三「郭沫若さんと私の『隋唐燕樂調研究』」をご一読いただければ、『隋唐燕樂調研究』成書および中国語版出版の経緯や、なぜ郭沫若自身が「隋代大音樂家——万宝常」を著したのか、ご理解いただけるものと考ええる。今回の紹介が、日本亡命期における郭沫若の事跡に関する研究の一助になれば幸いである。なお、私たち研究グループは、『隋唐燕樂調研究』を大いに参照した『隋書』音樂志解説作業の成果と、そして、『隋唐燕樂調研究』の日本語版を二〇一六年度に公刊する準備を進めている。

(一)一九三五年九月一日、上海の『文学』月刊五卷三期に発表。のち人民文学出版社『沫若文集』第十二卷所収(一九五九年六月)。

(二)同書七十一〜七十六頁。創文社、一九七六年二月。

君 故郷より来る―樂山沙湾郭沫若記念館を紹介する

陳 俐・著／岩佐 昌暲・訳

四川省樂山市沙湾区は、世界的文豪郭沫若の故郷である。峨眉山下、美しい自然環境のもと、波激しい大渡河の河辺、郭沫若はここでその幼少年期を過ごした。二十一歳以後、彼は故郷が育んだ文化的エネルギーを胸に、郷土を出て、精彩に富む外部世界と全力でぶつかり、合流し、一篇また一篇と人生の壮麗な章節を書きあげた。文化名人の成長と成果は、そこに生まれそこに育った文化生態と密接不可分な関係がある。故郷の文化は郭沫若の世界観と人格の形成に深い影響を与えた。彼の愛国思想、国学の修養、彼の学識才能、融通無碍、格式張らない性格、これらはすべて生まれ育ったこの土地の文化的要素と緊密に結びついている。郭沫若はずっと郷里の「沫河」「若河」二つの川を筆名としてきたが、それは自分が永遠に故郷と渾然一体でありたいという強い願いを示していた。

この文化巨人の故郷に対する敬慕と記念の情を伝えるために、二〇一二年、郭沫若生誕百二十周年の際、「樂山沙湾郭沫若記念館」が全く新しい姿で再建され、かつ無料で對外開放された。記念館は郭沫若が少年期を過ごした実家の裏庭のすぐ北側に、南向きに建てられている。敷地面積は六千五百六十六平米、建物の総面積は三千六百九十八平米、展示面積は二千二百平米である。記念館の本館は四川西南地方の民家を模した二階建て建築で、隣の郭沫若の実家の「三進四」（二つの中庭のある四棟の建物）

で構成される「四合院」の建築と呼応し、引き立て合っている。郭沫若記念館は地味で簡素な造りであり、四川西部の伝統的な民家の建築要素を大量に採り入れ、自然の智慧と文人気質の合致した建築の風格によって、自然の風光と渾然一体となり、天地と「我」が同一であるというイメージ、ムードを醸し出して、郭沫若を生み育んだ地域精神を集中的に表している。

記念館のメイン展示館を取り囲んでいるのは郭沫若文化主題公園である。公園は広さ三三五ムー、園内には四川西部の田園の特色を一つに集めている。庭園の植栽と彫像は郭沫若が好んだ動植物を主に、少年郭沫若の生活情景と自然環境の再現に務めている。園内には巨大な水牛と活発な牧童の彫像があり面白いコンストラクトを成している。悠然たる水牛と魚を釣ることもの動と静がいい。高い「文豹塔」と低い「銀杏亭」が交互に建ち、亭（あずまや）と高殿、回廊などが入り混じって美しい。小川のせせらぎ、池のさざ波、竹林の緑、高く延びた蓮の葉。百花咲き誇り、美と艶を競っている。

展覧館のメイン展示館の正面上方には古風素材で端正な文字で書かれた「郭沫若記念館」の扁額がかかっている。これは著名な革命家・文学者馬識途先生の書である。

記念館は、「序庁（ガイダンスホール）」と「君自沫水來（君沫水より来る）」、「国之棟梁柱」、「文芸新創造」、「史学開宏篇」の四つテーマの展示単位に分けられ、それぞれに「郭沫若の青少年期」、「風雲に際会した時代の大波の中での生涯と重要な活動」、「文学芸術面での創造的な成果」、「思想・文化と歴史・考古などの領域の開拓的な成果」を紹介している。四つの単位の

展示室はそれぞれに異なる装飾の特徴で、異なる展示内容に対応し、郭沫若のいろいろな段階の歴史的足跡と文化的成果を豊かに生き生きと復元している。

記念館の展示は郭沫若研究の最新成果を吸収し、大量の貴重な文物史料を通じ、それに場面を示す彫像、アニメ、マルチメディアによる情景提示などの現代的展示方法を組み合わせ、全方位、多角的に中国現代社会の発展に対する郭沫若の重要な貢献と波乱に満ちた伝奇的な人生を示し、この「百科全書」的人物の独特の魅力を浮き彫りにしている。

記念館の展示の重点は郭沫若青少年期の生活、および彼を生育てた故郷・沙湾、樂山県、成都市の自然環境と文化的生態である。展覧は「沫水之子」をガイドンスホールとして、まず写真と象徴、立体模型と油絵の背景を結びつける方法で、雄渾で荒涼たる音楽「銅河号子（銅河の舟唄）」の流れる中、秀麗なる綏山の山麓、壮大な大渡河の河辺、樂山沙湾の古い町の真実の情景をはっきり示し、郭沫若の故郷の自然環境を復元した。優れた山河は濃厚な地域の風情と地方の特色を表している。

引き続きの展覧は初めて公開される大量の文物史料で、郭沫若が幼年、少年期に読んだ『啓蒙画報』、『筆算数学』、『史鑑節要』、『経国美談』、『興国史談』などの啓蒙書と新学の教材を展示する。さらに嘉定中学と成都高等学堂分設中学に在学中の、郭沫若の練習帳や筆記ノートなどの文物がある。これらは中国・西洋両文化混交の環境、新旧交代の時代の大潮流の郭沫若に対する重要な影響を如実に説明し、郭沫若の独特の人格、精神の形成過程を際立って示している。中でも、かつて日本に留

学し政治と法律を学んだ長兄・郭開文は、精神と経済の両面にわたって郭沫若の思想の啓蒙と後の日本留学生活に対し、極めて大きな役割を果たしたことが分かる。

記念館で初めて公開された新発見の文物史料は少なくない。例えば郭沫若一家の貴重な写真、郭沫若の最初の夫人・張瓊華が郭沫若に書き送った手紙の原稿である。この手紙は夫に随って日本に行きたいという張瓊華の願望と、だが軽々しく人前に顔を出すのははばかられるという中国の旧式女性の危惧や、同時にまた郭家の両親の世話という責任も捨てるわけにいかないといった、様々に矛盾した心理が、余すところなく吐露されている。これは郭沫若の生涯と前世紀初めの中国女性の生存状態と心理の特徴を理解する上で、非常に価値のある研究材料である。記念館はまた郭沫若が成都の中学在学中、彼に重要な影響を与えた人物や事物を深く掘り下げて展示している。例えば、当時少年中国学会に参加していた重要メンバー、李劫人、曾琦（慕韓）、周無、魏時珍らとその活動である。これら一群の同郷人、同窓たちは、いずれも郭沫若同様に、さまざまな領域で重要な成果を樹ち立てた多能多才な文化人だった。彼らの郭沫若への影響はこれまでの研究ではほとんど触れられていない。

記念館のその他の展示室の展示内容でも、郭沫若の肉親への情愛や、郷土への感情に対する表現と展示には特に重視している。例えば抗日戦争期に帰省して父母を見舞ったり、訃報に接して帰省した折に抗日の公演活動を行なったりしたこと、また親戚や友人のために書いた扁額、書画、為書き、筆跡などである。一九三九年、郭沫若の父親が逝去した際、国共両党と社会

の各界は次々と彩彰と挽聯を送り届け、郭氏一家が国家のために人材を育てた重要な貢献を称賛し、郭沫若が文化面での抗戦において発揮した重要な役割を称え、同時にまた郭沫若が引き続き国家のために忠誠を尽くすようにという民族的願いを表明した。展示室は、蒋介石、毛沢東、周恩来ら国共両党の多くの政界要人、社会各界の代表的人物が書いた挽聯や筆跡を展示し、郭沫若が二十六年後に帰郷して父のために葬礼を行なったときの実景を復元している。

展示はまた情景の彫像、幻影を用いたイメージ、漆絵、マルチメディア、アニメ、コミックなど現代的展示、陳列方式によつて、全面的、多角的に郭沫若と故郷との情誼を展示している。

例えば、アニメの形式で、幼い郭沫若が魚釣り、遊び、詩や対聯の吟唱で示す聡明や活発さを表現する、漆絵で彼と小学校の級友との真摯な友情を表現する、幻影のイメージで中学時代の郭沫若が冬休み中、郷里の人のために春聯を書いているのを表現する、立体的彫像で中学時代の郭沫若が成都の有名な公園「望江楼」で学友たちと「詩鐘をつく」（詩詞を唱和する）情景を表現する、マルチメディアの映像で郭沫若の望郷詩「峨眉山上の白雪」の情趣を表すなどである。これらの現代的展示陳列手段は対応する史実と主題とを非常にうまく浮き彫りにし、記念館の可視性と興趣を増加させている。

郭沫若はその生涯で、二つの重要な時期（留学期と亡命時期）を日本で過ごした。記念館の展覧陳列は郭沫若の人生と重要な成果のうち日本に関わる要素に十分な配慮と紹介をおこなっている。すなわち「東渡留学誓救国」（日本に留学し救国を誓う）

という展示セクションを専門に設置し、郭沫若の日本留学期の生活と思想を十分に示しているのである。展示室の設計は濃厚な日本の風格と情調を具えている。郭沫若の詩集『女神』の展示紹介では、博多湾の海原の様子、また郭沫若と佐藤をよみ（中国名「安娜」アンナ）の恋愛が郭沫若の心に与えた大きな衝撃と詩作の靈感を目に見えるように示すことに注意をはらった。愛の川に身を浸していた郭開貞（郭沫若）は英語でアンナのために散文詩を書いた。この詩「辛夷集・序」は自分を渴きで死にそうなる魚に譬え、アンナは満々たる清冽な泉の水だとしている。

「私の作詩の経過」の中で、郭沫若は「あの頃の傾向は、もう一步で凶器の敷居を越えてしまうとところだった。私をこの狂気の一步から救ってくれたのは、恐らく私とアンナとの恋愛だったということになるのか」と書いている。開貞（郭沫若）はアンナに対する愛を次々に情熱的で真摯な詩に変えた。『女神』に収められている「新月と白雲」「死の誘惑」「別離」「ベニス」はみな一九一六年ごろ、前後して彼女のために作ったもので、これは郭沫若の最初期の白話現代詩である。「女神」という核心的なイメージは、郭沫若が中国の伝統神話を吸収し、また愛情深い、寛容な現代女性に対する彼の賛美を含んで創造した。

アンナは、かつて沙湾の故居記念館に丸い釉鉢を寄贈したことがある。前世紀、郭沫若が日本に亡命した時代、彼は創作と翻訳の原稿料で一家の生計を支えていた。多分、一九二九年、郭沫若は初めて翻訳料を得た。彼とアンナは大変喜び、一緒に東京上野の松坂屋に行き、円型と四角の二つの釉鉢を買った。

円い鉢はお菓子や果物を入れて客をもてなすのに、長方形のは印鑑を置くのに使った。長方形の鉢は、後に友人の李一氓に送った。一九二七年盧溝橋事変後、郭沫若は決然として単身帰国、抗戦に身を投じた。アンナは五人の子供を抱え、警察に叱責され、吊るし上げて殴打され、監禁されるなどしたが、その艱難辛苦は想像に余りある。一九四八年、アンナは五人の子供を連れ、釉鉢を持って、台湾、香港経由で中国に来て居を定めた。

この円い鉢はずっと女主人によって大切に保管されてきた。一九八四年、九十歳近い高齢のアンナ夫人は、しきりに彼女の第二の故郷―沙湾を思い、行きたがったが、すでに高齢で、病気のため行くことはできなくなっていた。彼女は自分に数十年間も付き従っていた「円い釉鉢」を人に託して故郷沙湾に送り返した。このたびこれも貴重な文物として公開したのである。

第四セクション「史学開宏篇」の展示陳列は、歴史学、考古学、甲骨文字考釈等の面で郭沫若があげた輝かしい成果に力点をおいて紹介する。展示資料では文求堂とその主人田中信太郎や東京の東洋文庫が郭沫若に与えた多くの支持と援助を重点的に説明している。郭沫若は田中信太郎の知遇の恩に非常に感謝していた。彼はこう述べている。「私が『両周金文辞大系』を編み終えたばかりのとき、それは日本での生活で最も困窮していた時でもあるのだが、彼が二百元でこの原稿を買って取ってくれ、私が日本で自立でき、大勢の人が私を知るようにしてくれたことを、私は忘れない」。そして甲骨文字金文に関する研究書九冊は、いずれも文求堂が出版したのだった。

展覽はまた民間外交を利用して、中日関係の正常な、よい方

向への発展を推進した重要な功績にも十分注意している。

一九五五年郭沫若は中国科学代表团を率いて日本を訪問した。二十日余りの日本訪問中、足跡は遍く東京、京都、大阪、広島、岡山、福岡、千葉、下関、箱根等の地に及び、親交を結んだ学術界、文化教育界、文芸界など各界の新旧の友人と会見した。また東京大学、明治大学、早稲田大学、九州大学、京都大学、岡山大学などの大学を訪問し、各種の座談会、歓迎会に出席し、かつ講演を行なった。各行先では日本各界人士の熱烈な歓迎を受けた。訪問中、郭沫若が最も多く語ったのは次の言葉だった。

「中日両国人民はとりわけ平和に共存する必要がある。われわれ両国人民の友好関係の強化は、両国人民の利益に合致するだけでなく、アジアと世界の平和を維持する助けになる。」彼と代表団のこの訪問は、中日両国関係の正常化と中日両国人民の友誼に新たなページを書き添え、国際社会から高い評価を得た。

楽山沙湾郭沫若記念館が全く新しい展示内容と独特の形式風格を具えたことで、二〇一二年の一般公開以来、参観する観光客が絶えず、郭沫若の故郷はますます関心を集めている。

二〇一三年には「楽山沙湾郭沫若記念館」は「沙湾郭沫若旧居」とともに、中国四A級観光風致地区に認定された。郭沫若の青少年時代の生活と学習の環境をよりよく展示するために、目下「沙湾郭沫若故居」は国家の文物保護の要求と修復の原則に従って、大規模な補修工事を行なっている。復元後の「郭沫若故居」は、一九一六年元旦前後に正式に一般公開されることになっている。

日中学術研究集会「清末民国初期の来日中国人留学生と中国現代文学」開催

三月二五日、日本郭沫若研究会は、九州大学大学院言語文化研究院、日本現代中国学会西日本部会と共催で、「清末民国初期の来日中国人留学生と中国現代文学日中学術研究集会」を福岡市の九州大学西新プラザ大会議室で開催した。参加者は計五二名。盛況だった。

集会には、中国から李怡北京師範大教授、劉福春中国社会科学院研究員ら一四名の研究者が参加、うち一二名が、日本側は一二氏が発表を行った。集会は、大澤武司現代中国学会西日本部会代表の挨拶に始まり、日本郭沫若研究会代表の岩佐の総括で閉幕した。論文の予稿集を配付し、口頭での発表は最長一五分以内に制限、また通訳をつけず、中国語使用を原則としたおかげで、六時間二〇分の時間内に二四名が報告をするという窮屈、かつハードなプログラムだったが、時間通り順調に予定を終えた。集会終了後、西南学院大学クロスプラザに移動、約三〇名が参加して懇親会を行った。翌二六日午前は、貸切バスで九大医学部、箱崎、大宰府など郭沫若文学関連の史跡巡り、午後は開花間もない福岡城の桜を楽しんだ。

研究発表のテーマは「留学」をキーワードとし、文学のみならず音楽、美術、留学制度、日本の中国学建設など多岐にわたった。ただ質疑と討論の時間がとれず、議論が深められなかったのが残念だった。最後に研究発表の主題を記し、内容の一斑を紹介したい（発表順、括弧内は報告者。所属は省略）。

留学と異文化認識（藤田梨那）、東文学堂と清末民初文学（王学東）、日本経験と中国近代学校音楽（傅宗洪）、留日期郭沫若の自然視野（李怡）、目加田誠の北京留学（静永健）、濱一衛の中国留学（中里見敬）、三〇年代北京旧書店（稻森雅子・邵劼）、革命文学の勃興と日本要素（張武軍）、中国の革命文学と日本の普羅文学（王雲燕）、日中「武俠」比較（呉双）、傅抱石と金原省吾（成家徹郎）、劉錦堂と日中台の近代芸術（羽田ジェシカ）、春柳社研究（瀬戸宏）、留日学生と日本新劇界（間ふさ子）、夏衍の『法西斯細菌』（武継平）、周作人訳の武者小路実篤『久米仙人』（裴亮）、周作人・錢稻孫と九州学者（呉紅華）、留学時代の魯迅と章炳麟（李哲）、清末留学政策と郭沫若兄弟（劉建雲）、郭沫若と聞一多（劉殿祥）、郭沫若初期小説（顏同林）、李劫人の省都革命史（鄭怡）、日中教育交流（錢曉宇）。

編集後記

前号が出たのが12年12月1日だったから、まるまる3年ぶりの刊行である。会報は平均毎回20頁だが、今号は40頁、巻頭の藤田論文以下巻末の陳例氏寄稿文まで、合計10本。従来の理解への修正を迫るような新資料の発掘、新視点の提示をふくむ力作が揃った。郭沫若研究の対象が拡がりつつあるのを実感する。

■ 昨年は事務局を移転、同時にホームページアドレスも変った。また7月に日本聞一多学会との共同研究会を、今年3月に本会主催の国際学術集会を開いた。来る年は再出発の気分、ホームページを拠点に、研究活動を少しでも前進させたい。そのため、寄稿と会費の納入。ご支援をお願いしたい。（事務局）